



安富筆記

六

六

増5
494
6





一 二上峰 嶺共 日向國 日向郡 高千穂ノ峰 越後高野

上峯ト云天孫ノ瓊杵ノ天降タマヒニ峯也又巽竈

摠觸峯トモ云又摠日峯ト云同國諸縣郡 關野舊書記

リ山上峯ニツニ分レタリ故ニ此本ニツ有ルト二上

峯ノ名ト紛レテ霧嶋峯ト二上峯ト同所也ト云説ア

リ誤也二上ハ天孫ノ降り給ヒシ処霧島ハ天孫ノ弟

ヲ立給ヒシ処也是又紛レテ同処也トスルノ由也天

孫ノ二上山ニ降り給ヒシ時山霧起テ晦冥ナリシヲ

稻穂ヲ取テ打拂ヒ給ヒケシハ霧暗レテ清明ニ成レ



取テ打拂フ事有リ是示紛ル、事ノ由也西山郡別ニ  
ナレハ同処トスル説ハ大誤ナリ此事ヲ貞丈歌ニ今  
霧島ノ二峯ナルヲ高千穂ノ二上嶽ニマカヘサラナ  
ム

一 大サ長サト云詞 大長高廣深等ノサト云ハサマノ  
畧語也大様長十様高十様也アノサマ此サマノ様ニ  
同シ

一 マヒト云詞 物イマヒ耻カシマヒノ類マヒノ約語  
也マヒトナル及物イマヒハ物イマヒ也耻カシマヒハ耻  
カシマヒ也詞ヲ能ク知ラサレハ古書ニ通ゼス

一 ボンボリト云扇 廿房私記ニ扇ハ中廣也ト有リテ

傍注ニボンボリト云トアリ此傍注ハ兼秋門院ノ典  
侍石井ノ房ノ説也 貞丈云中廣トハ扇ノ中半ヨリ  
サキノ廣カリタル也 中啓共末廣トモ本名ハカハボ  
リト云 蝙蝠ノ字也古書ニハ皆カハボリト云 今世ハ  
字ノ音ニテヘンフクト云ハ雅ナラズ

一 粽ノ割 千マキト云ハ茅卷也茅ハ千カヤ也今ハマ  
コモニテ卷ク也

一 紅白水引 或人同テ曰紅白水引ニテ包物ナト結  
ブニ紅白ノ色左右如何 貞丈答曰定ナシ然レハ結  
ハガル以前ニ白ヲ左ニシ紅ヲ右ニスベシ 白ハ五色  
ノ本也左ハ陽ニテ貴キ方ナレバ白ヲ左ニスベシ

一 藤原ノ字太細 堂上衆ノ位署ニ藤原朝臣ヲ必筆細  
 ニ書也或識者ノ云 朝倉本家ニテハ筆太ニ書リ末家  
 ニテハ筆細ニ書ク例也ト本家ハ攝政家也  
 一 無地 今世俗ニ無文ノ事ヲ無地ト云ハ誤也文ハ地  
 有テ其地ニ文ヲ付ル也地ナクテハ文ヲ付ル処ナシ  
 一 無詮所詮 今世俗セニトシ又シヨセニト云 詞ニ詮  
 ノ字ヲ用ルハ當ラス詮ノ字ハ玉篇ニ具也サツグ 評ハ  
 ル字彙ニ擇言也フエラ 解喻也サト 評論事理也ハカ 詳  
 校篇海ニ平也註也トアリ 俗語ノ意ニ合ハズセニト  
 シハ 無專也シヨセニハ 所專也專ノ字ハ字彙ニ壹也  
 ハモツトアリモツハラトスベキ事ニ非ルヲ 無專ト云

モツハラトスル所ヲシヨセニト云 詮ノ字ヲ用ルハ  
 非也

一 油持 公卿参内社参等ノ行列ヲ記タルニ油持トア  
 ルハ車ノ輪ニサスベキ油ヲ持テ行ク役人也油トハ  
 カリ書キタルモ有リ  
 一 牛飼童 乗車ノ牛ヲ使フ者ヲ牛飼童ト云垂髪ニテ  
 狩衣ヲ着テ鞭ヲ持也歳十七八九十ドハ勿論ナリ三  
 十四ニ至リテモ童ト称シテ童ノ躰ニテアル也牛  
 ノ使ヒヤウニ巧拙アリ  
 一 朱印色粘 朱印肉油凝リ粘リテ悪キニハ木ノ實ノ  
 油ツハキノヲ交ノヨキホドニユルノ焼明礬ノ粉ヲ

入レ朱ヲ加ヘ入レカキ交テ用ベシ子バリ去ル也

一日本水土。西川恕軒が日本水土考曰、國渾地圖大瀛海之裏陸土自相断成三大界、第一界在中帶赤道之北、而經度極大者便分畫以作三洲、曰亞細亞、曰歐羅巴、曰利未亞、第二界在利未亞之西、而橫於赤道之南北者、曰亞墨利加、第三界在於赤道之南、而廣相連者、曰墨瓦臘尼、總是為五大洲也、萬國各在於五大洲內、亦許多島嶼各屬其界、洲俗所謂世界者是也、蓋三大界中以第一界為勝、第二、三者次之、故論地理者必以第一界為水土之正也、於其第一界三大洲中、以亞細亞大洲復為勝、是第一也、亞細亞洲之中央為辰具辰且、之西為天竺辰且、

之東頭有日本國、日本之東瀕海遠濶、世界之第一、於而地勢相絕、故圖上雖以亞墨利加洲置於東、地系還接於西方、而其水土陰惡偏氣國也、接地體渾圓之理、則當以亞墨利加屬於西極、地體渾圓本雖無東西之定處、以一物一乾坤之義、則莫不具箇々一太極、以此理可定方位、矣、○又曰、定日本所在之方角、從第一界之南赤道上、而窮之、則在艮位、從亞細亞中央之地定之、則在正東、所位也、○又曰、此國在萬國之東頭、而朝陽始照之地、陽氣發生之最初、震雷奮地之元土、主于所、故木德也、○又曰、此國艮震極瑞之地、而陽氣發生之始也、陽物初生者、其質穉弱、其氣強壯也、故日本人多仁愛之心者、篤稟震木發

生氣也專武勇之意者因得良山強立之精也亦其性好  
 清麗潔白之物而惡陰濁穢氣之類厚吉禮薄凶禮歲且  
 婚姻等加儀雖庶人其禮甚嚴重異於他邦者歲具陽氣  
 祭見之始婚姻人倫生生之始也蓋神者伸之氣而非屈  
 之氣故此民恒好怡悅之色而忌哀愁之貌是以詳於祝  
 其始之儀而疏於哀其終之事是之國自然民情也○又  
 曰此國為神國之義水土自然之理乎史記云東北神明  
 之舍云云東北艮位陰陽終始之地而陽神來陰鬼往之  
 地於節氣則為除夜之處冬陰之殺氣退而春陽之生氣  
 來也故此夜戶戶迎陽神之福迺陰鬼之凶者是適日本  
 水土之俗也是皆神國之儀而敬信神明有勝於異邦矣

○貞丈曰此西川ヲ説天地陰陽自然ノ勢ニ隨テ水土  
 之異ヲ明ニシ生民ノ性ヲ詳ニセリ 証ニ非ズ他ノ腐  
 儒水土ノ考ナク漫ニ倭俗ト稱メ賤シメ侮ル者ト同  
 日ノ論ニ非ス

一清家字突 清家ハ清原氏今伏原ト稱号ス

字突竹ヲ以テ削リ制ス皮ノ方平ニシテ肉ノ方九シ皮  
 ヲエソケズ 天子皇太子ノ御字突長ハ八寸其内柄長  
 二寸五分五厘本末弘サ二分厚本末一カ五厘竹節ナシ



侍讀尚復ノ字突長一尺二寸三分節十二分二分末二分羊本厚一分五厘本末同柄長三寸五厘形右ノ因ニ同シ是モ竹ナリ侍讀ニ尚復ニ遠ヨリ字ヲ突ク故字突長ニ

一吾國忌肉食

源元珍相崎日本風土輯說云德川神君

駿府御陰居ノ日彼地淺間ノ神主松社宮内某ニ問テ宣ハク當社ノ産子トシテ産上神ノ甚嫌ハセラル、神誠トテ決シテ獸肉ヲ食スルヲ忌ム山一ツアサタノ信濃ノ諏訪ノ社ニテハ彼神ノ許可トシテ産子平常ニ獸ヲ食シ刺其社ノ祭禮ニハ七十二ノ鹿ノ頭ヲ備ヘ祭ルト云此各別ノ様子ハ如何ト宮内答テ申

サク上古ハ我國專ラ獸ヲ食シ候事既ニ日本書紀ニ擧テレ候然ルニ凡長門國萩ノアタリヨリ陸奥津輕ノ地ニ至テ此日本ノ正中ヲ山一筋ニ續キテ南北ヲ隔タリ是故ニ其山ノ東南ノ諸國ハ甚温暖ノ也又其山ノ西北ノ諸國ハ甚寒冷ノ國也去レハ東南ノ方ハ人民漫ニ獸肉ヲ食スレバ莖熱シテ惡病ヲ煩フ也是ヲ以テイツトナク伊勢ニシテハ二所皇大神ノ甚嫌ハセ給フトテ百日肉火ノ食穢ヲ禁忌セラレ、事天下第一ニ嚴重也其外諸國ノ諸社各是ヲ忌ム也殊ニ當社別シテ禁忌甚ク若産子此神制ヲ破リテ竊ニ獸肉ヲ食スレハ忽チ癩病ヲ煩フ事古今眼前ニ顯然

タリコレハ是公義ノ制禁トシテ下知セラレシニ東  
南ノ地ハ肉食ニ不合モノユヘ食スレハ惡病ヲ受ク  
日本ハ小国ナレバヒタスラニ 獸ヲ殺セハ其類尽テ  
民用ヲ闕ク必ス食スル事勿レト 嚴密ノ公命出タリ  
トモ一文不通ノ土民其口ノ為ニ其身ヲ抛テ中ニ其  
制禁ヲ守ル事アルマシク候然ルニ其産土神ノ嫌ヒ  
忌ミ給フト云ヘバサスガニ人情ノ自然正路ノ思ヨ  
リ他人ノ食スルヲ見テモ仇ハジキシ公儀ノ按父母  
ノ戒ヨリモ心ヨリ能ク恐レ慎ムユヘイツトナク神  
制ト称メ忌ム事嚴重也適九国ノアタリ 獸食不忌土  
風アリトイヘ共其忌ム方ノ宮社国人ニ白ヒテハ口

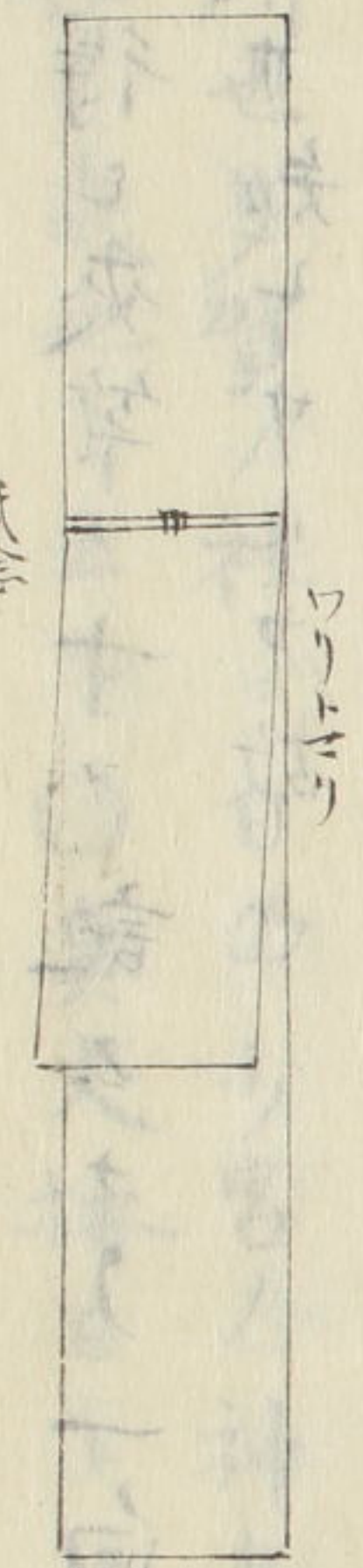
ヲ覆フノ耻情アリ又カノ山ノ西北ハイツレモ寒国  
殊ニ信濃ハ別テ嚴寒ノ地又當国富士ノ根方ナドモ  
無雙不毛ノ所至極冷凍ニシテ民食常ニ乏ニ是等ノ  
土地割ヘ魚物ヲ闕クサレハ不得止シテ 獸肉ヲ食シ  
候因茲其産土神ニ祭祀ニ 獸肉ヲ享ケ給ヒ其産子モ  
神制ノ禁忌モナシ是皆神慮其土地ニ應ヒ給フ自然  
ノ御惠也ト答申タル時神君甚感心ニ給ヒ如何ニモ  
其方云フ処是寔ニ日本肉日ヲ忌ムノ真理也別シテ  
恐レ慎ムヘキ事也ト仰ラレシト也  
一倭国 漢土ノ書ニ吾国ヲ号シテ倭国ト云又倭面国  
ト云又倭奴国ト云紫玉篇ニ倭鳥禾ノ切国ノ名トア



リ音ワ也又於為ノ切順フ貞トアリ音イ也小補韻會  
 ニ鳥禾切女王国ノ名在東海トアリ音ワ也又邕危切  
 集韻慎貞增韻又謹貞トアリ音イ也日本国ハ渾地東  
 極ニ在テ少陽ノ氣ヲ稟ル国ナル故ニ生民ノ性情温  
 順ナルニ依テ人ニ偶テハ慎謹スルヲ漢土ノ人見テ  
 倭国ト称シタルナルベシ倭面上ハ性情ノ面ニ奈見  
 スル也倭奴ハ賤シメ呼ブナリ順フ貞慎謹貞ニハ  
 ノ音ナルヲ国ノ名トスルニ至テハハノ音ヲ轉シテ  
 ワノ音ヲ以テ称セシナルヘシ倭ノ義ハ元ト上ニ云カ  
 成ルベシ

一夾ケラサニ 書ヲ讀テ羊ヤクニ至テ止ム時未ダ讀マザル所ノ

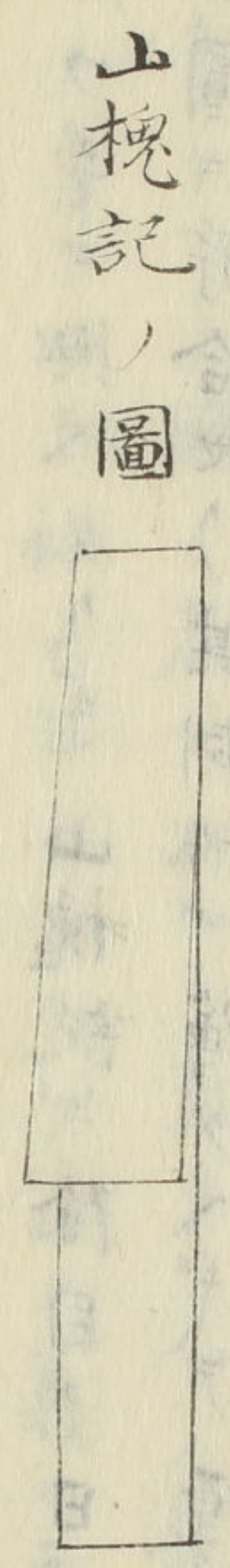
シルニ夾ニ置ク物也高野山ノ古キ藏書ニ夾ニテ有  
 之ヲ摸シテ傳ヘタリトテ村井敬義カ制シタリシヲ  
 一ツヲニ與ヘタリキ山槐記ニ除目ノ日ニ用ル夾竿  
 ノ圖ニ符合セリ其制竹ヲ薄クヘギテ厚サ三厘ハカ  
 リナルヲ又半割リカケテ二斤トナスワリタル分一  
 寸九分ワラザル所一寸一分ホドアリ二片ハ内一片  
 ヲハ長サ七分切捨テ短クシワレ止リノ際ヲ甚細キ  
 紙捻ヲ二重廻シテ竹ヲ短キ方ノ中ニテ結ヒ切ル也  
 山槐記ノ圖ニモ紙捻ニテ結也其図左ノ如シ



定ル寸法モアルマ  
 ニキ事ナレト今予

カ得シ夾笈ノ寸ヲ記スナリ一向ニ寸ヲ知ラザレバ  
大サ知レザルカ故也

清少納言枕草子云村上ノ御時セムヨリてんれ女  
御とささえげりハ小一糸皮の内むきの小おりま  
しけを中畧ゆさうしよけさしんまゆいとのおり  
ぬるもいやめでさう云々北村季吟ガ枕草子春曙抄  
よけさしハ境算欵と注サハあやまら



件夾笈大外記師元朝臣作之與帝也寸法如此以行  
黃作之長甲方也其負廿許以細紙捻真結之清家笈頗短或又以

系 ○右枕草子山槐記ノ文日下部勝美之考也

一日之少宮 神道類聚名目抄云神代卷云伊弉諾尊功  
既至リ又徳又大ナリ 於是天ニ登リニシテ 報命必  
マフ仍テ日少宮ニ留宅ニシキ又云 諸社根元云日之  
少宮トハ近江国犬上郡多賀大明神是也江州良ノ方  
日ノ初テ出ル方也故ニ日ノ少宮ト云近江ヨリイカ  
程ノ国アレハ江品ヲ指テ中国ニ用エル也又云古事  
紀云伊弉那藝大神淡海ノ多賀ニ坐云云又云按ニ日  
ノ少宮ハ伊弉諾尊崩ニマシマシテ 御靈ノ鎮リマ  
所也多賀ノ社ニ日ノ少宮ノ神事トテ例年祭アリ深  
秘ノ義也ト云リ ○負夫按日トハ壽命ヲ指テ云人初

テ生ル、ヨリ終ニ死スルニ至ル迄ノ間ハ毎日、  
日ヲ短ル也一生ノ間ハ日也サレハ命ヲサシテ日ト  
云也万葉集卷二柿本人麻呂ガ高市皇子城上殯之時  
ノ作歌并短歌ヲ載テ其次ニ或書及歌一首 哭澤之  
神社示三輪須惠雖禱祈我王者高日所知奴トヨメリ  
哭澤ノ森ハ仙覺抄ニ紀伊国ニアリト云三輪ハ酒也  
哭澤ノ神社ニ酒ヲ居工奉リ病ヲ祈レドモ我ガ五人  
命ノホドハシラシ又ト也知ラレヌハ不可知也古注  
又ハ畢也ト云ヘリ人此死ハ天命トテ天ニシラレ也  
去ヲヨム歌ヲハ是祈リニガトアルハキナリ祈レドモ  
ニセスミテ云高日ノ高ハ敬貴ブ詞也高天原高御座  
ヒタルナリ

高鞞高千穂峯ナド、云同例也皇子ノ御命ナルユヘ  
敬テ高日ト云也古注ハサテ日之少宮ノ日ハ伊弉諾  
尊ノ御命ナレバ是モ高日ト云ベキヲ高ヲ略シテ日  
ト云也ワカハマカルト云ヲ轉ニテワカルト云ハハ  
横ノ通又其ワカルヲ下畧ニテワカト云マカルハ三  
也人ノ死ヲ身マカルト云也伊弉諾尊ノ高日ノマカ  
リタマフ所ナルユヘ日ノワカ宮ト云也少ノ字ハ訓  
ヲ借リテ用タル也文字ニ拘ラズワカルト云ハ退也  
一四方字訓ヨモトヨムハ日カモノ畧也王月モハ西  
面也

一人麻呂歌似被詞 万葉集卷二日並皇子尊殯宮之時

柿木人麻呂歌一首 並短歌本紀並皇子八草壁皇子也日

皇子於大津宮持統三年四月 飛鳥清見原宮ト云 天武天地

之初時之久堅之天河原尔八百方千万神之神集集座

而神分命之時尔天照日女之命一云指上天乎波所知

食登葦原乃水穗之國乎天地之依相之極所知行神之

命等天雲之八重搔別而八重雲別而神下座奉之高照

日之皇子波飛鳥之淨之宮尔神隨太布座而天皇之敷

座國等天原石門乎用神上上座奴尔之可導座下畧日

皇子ハ日並皇子也以上ノ文ニハキノ尊ヲ天降ニシタ  
云フ例ヲ以テ云フ也神隨ハ神ノハカラニニマラス  
云フ例ヲ以テ云フ也神隨ハ神ノハカラニニマラス

云フ例ヲ以テ云フ也神隨ハ神ノハカラニニマラス

被ノ文ヲ赴ヲ以テ作レル故上古ヨリ被詞アリ来レ

ル故古事紀ニ仲哀天皇頃ニ前タマヒ時武内宿禰

國ノ大被セヒ時ノ文ニ今ノ大被ノ詞ニ似タル事ア

リ又大被詞ノ中ニ大津櫻谷延喜式ノ大被詞ハサ

抄ニハ詞トアラタニ名ハ近江ノ地名也天智天皇近江

志賀大津宮ニ都ヒタマエリ然レハ天智ノ朝ニ至テ

被詞ノ舊詞ヲ潤飾改定セラレヒ故今ノ中臣ノ被詞

是ナリ

一ゲゲ ワラノゲバト云ハ常ノワラザウリ也井ノゲ

ゲト云ハ蔭カラニテ作りタルサウリ也盛衰記ニア

リ井ノゲガ飾抄蔭がテハ燈心ヲ引取タルアトノカ

ニ有ニカ尋ヌヘシ蔭がテハ燈心ヲ引取タルアトノカ

ラ也大和河内等ノ土民ノゲゲト名付テハク藁ザリ  
 リ左ノ図ノ如シ

八十緒一筋也  
 ウラミテ結フ  
 紙ニテ包マズ退也



長サ足ニタケホトアリ細長  
 廣サハ足ヨリ狭シ

此末三寸五分也但ソロバ  
 少先ヲカルソロバズ

此所細縄ニテ結フ此内ニ緒  
 ノ末モツミユイユムル

惣躰ワフヲニツチリ申テ平クニツ組ニスル甚廉相  
 ニ作タル物也

右ノゲゲ甚古風ナル物ユヘ是ヲ記ス本ハ此躰ナル  
 ヲ後ニ巧ヲ加ヘテ今ノザウリヲ作り出シタルナル

ベシ 村井敬義云大和河内ノゲゲ右ノ図トハ少異也  
 時其申ニアリ神前  
 奉ルヤリトイフ

一 小素襖 上ハ常ノ如シ袴ハ足ノクルバニ迫也本ノ

素襖袴ノ畧也 上ハ短ア也

一 小袴 室町家ノ時ノ書ニ小袴トアルハ無文ノ平絹

ノ指貫ノ袴也 平絹ハ指貫ハ括リ重也 但太ク狭細ク狭筋ヲ

深ル由宗土記ニ見

一 葛袴 葛布ノ小袴也色白シスソノ方括リ緒通ス所

ハ平絹也葛布ハコバクテ括ラレ又故也今蹴鞠ノ葛

袴ニハ前ニ細長キ草ヲ二筋付ル常ノニハ付バ前級

ニモ後腰ニモ大針小針ノ上サシアリ一躰指貫ニ替

ラス相引ノ兩方ニキクトゲノフサヲニツ、付ル事  
モアリ此躰古画ニ見エタリ

一指子コサシ 平翁ノ指貫也サシエトハ指貫ノ小袴ト

云事也サシヌキトハ括リ緒ヲスリニサシヌク也今

有文アルヲ指貫ト云ニ無文ナルヲハ指子ト云テ差

別ヲ立ル也本ハ一ツ也

一位署連署連判 此三ツ俗説ニ紛ラハシキ事ヲ云ニ

依テ記之也○位署トハ署字ナシルニトヨム名ヲ記

ス也官位氏姓名姓名ハカバ子也ヲ書ヲ位署ト云テ其

書様法式故実多シ○連署トハ一通ノ文書ノ奥ニ多

クノ人数位署ヲ書キ連ヌルヲ云其文詞并官位氏姓

ニテハ右筆ノ人ニ書セテ名実名也ヲバ自身ニ書ク

也花押ハキ判ヲスル事ナシ○連判ト云ハ官位氏姓

ヲ右筆ノ人ニ書セテ名ヲ実名不書ニテ判ヲ居ル也

是ニ多ノ人数連テ判ヲ居ル故連判ト云也○連署ハ

名ヲ自身ニ書テ判居バ連判ハ判ヲ自身ニ居テ名ハ

不書也判ハ本ハ実名ノ二字ヲ草ニ略ニテ作タル物

ニハ判居レバ実名ヲ書バ実名ヲ書ケバ判ヲ居ザル

也名ヲ書テ判ヲスルハ二重也然ルニ今ハ二重ニ

スル風俗ニナレリ実名草名ト云テ

一食國ウツクニ 職原抄ニケクニト訓ヲ付タルハ非也ヲシク

ニトヨムベシ一乃葉集卷二高市皇子尊城上殯宮之時

実名草名ト云テ  
吉部秘訓ニアリ

柿本朝臣人麻呂作歌曰挂文忌之伎鴨カケ畧カケ狗劍イヌノ和射見カケ  
我原乃行宮亦安母理座而天下治賜食国年定賜等カケ  
○ケクニトヨミテハ文詞ノ語教足ラズ日本紀ニ御  
食ミラニストアリヲシハ食字クモノ也人ノ生命  
ハ食ヲ本トス人ノ食物ノ生スル因也ホメテ云也一カ  
葉安見ニ食因ハ帝王ノシロシメス因ト云也トハ非  
歟

一普請 家屋ヲ造営スルヲ普請ト云ハ本佛家ノ詞也  
佛寺堂塔ヲ立ルニ其入用ノ金錢ヲ普ク諸人ニ請ヒ  
求ルニハ普請ト云也下学集云普請諸人作事故云普  
請也○和爾雅云佛家謂營作家作スル為普請敕修清規云

普請之法蓋上上均力也介休堂司行者報衆掛普請牌  
仍用小片紙書貼牌上云某時某處○又云按普請二字  
出十三國志呂蒙傳然非謂營作之義○貞丈云我國史  
及上世之書ニ俗家ノ造作ヲ普請ト云タル例ナシ俗  
家ノ造営ヲ普請ト云ハ甚近キ世ノ詞ナリ

一元明陵隼人像石碑 今昔物語卷卅一元明天皇陵點  
定惠和尚語モウシ弟ケ世曰輕寺ノ南也此レ元明天皇ノ檜前  
ノ陵也石ノ鬼形共ヲ廻池邊陵ノ墓樣ニ立テ微妙  
也造レル石ナド外ニハ勝レタリ○貞丈案元明天皇  
ノ檜前ノ陵トアルハ誤也元明天皇ノ陵ハ大和國添  
上郡推山也續日本紀ニ見ヘタリ延喜式ニハ奈保山

トアリ推ノ字ハ櫛ノ字ノ誤ナルベシ先王廟陵記曰  
或曰今俗曰大奈部七足狐地名ノ邊有七立石石鑄狐  
トアリ此狐ト云ハ隼人ノ像狗頭ナルヲ土人見テ狐  
ト云ナルベシ又案日前ノ陵ハ文武天皇ノ陵也延喜  
式ニハ檜前續日本紀ニハ檜隈ニ作ル大和国高市郡  
ニアリ天武天皇ノ陵モ檜隈ニ在リ持統天皇ノ陵モ  
檜隈ニ在リ  
一御火之臺 逍遙院殿ノ調度歌合ニおんほがよ番ひ  
て御火の臺あり火ハ借リ字ニテひノ訓を借リタル  
也実ハ槭ノ字也訓比槭ノ事ハマクナギノ卷ノ槭殿  
ノ条ニ委ク記ス見ベシおんほがよハ虎子ト書ク小便

ツボトリ

一不孝不教 不孝ハ子トシテ父母ニ逆スル也不教ハ  
父其子ヲ教ガル也俗ニ父其子悪事アルヲ教ヘ誠レ  
ドモ聞ズ悪ヲ改ガル故其家ヲ追ヒ出スヲ勸當ト云  
勸當ヲ父ノ不教ト書クハ誤也勸當ニテハ父再々ヒ  
其子ヲ教ヘガルコトヘ不教ト云也孝ト教同音ナル故  
俗ニハ文字ヲ取違ヘテ大ニ其義違フナリ  
一皇親神漏岐神漏美命 皇親トハスベラギニムツマ  
シキト云フ事ニテ天皇ノ御親戚也漏ハ助語也山鳥  
ノ尾ノ鏡ヲ尾呂ノ鏡ト云類也岐ハ男神也美ハ女神  
也伊邪奈岐伊邪奈美沫那岐沫那美ノ類ニテ知ルベ



シ天皇ノ御親戚ノ男神女神ノ命等ト云事ヲ皇親神  
漏岐神漏美命ト云也廣ク云フ稱也二神ノ名ニハ非  
然ニ神漏岐命ハ高皇產靈尊トシ神漏美命ハ天照  
太神トスルハ誤也

一タチト云詞 神タチ人タチ公ダチ女房タチナドノ  
タチニ俗ニハ達ノ字ヲ用テ訓ヲ借りタル也実ハ等  
ノ字也タチトヨム也又カニダチベテ上達部ト書ク  
達ノ字ヲ用ルハ俗ナリ上立部ト書クベシ堂上ニ列  
立スル部類ノ人ト云事也公卿ヲ云也

一造城 日本紀神武天皇紀己未年春二月壬辰朔辛亥  
中皇師立誥之處是謂猛田作城處是日城田神代ノ城  
出雲凡土

記ニアリ赤鳥ノ卷ニ記セリ

一赤染氏 續日本紀稱德天皇天平勝宝二年九月丙戌  
朔正六位上赤染ノ造廣足赤染高麻呂等二十四人賜  
常世連姓

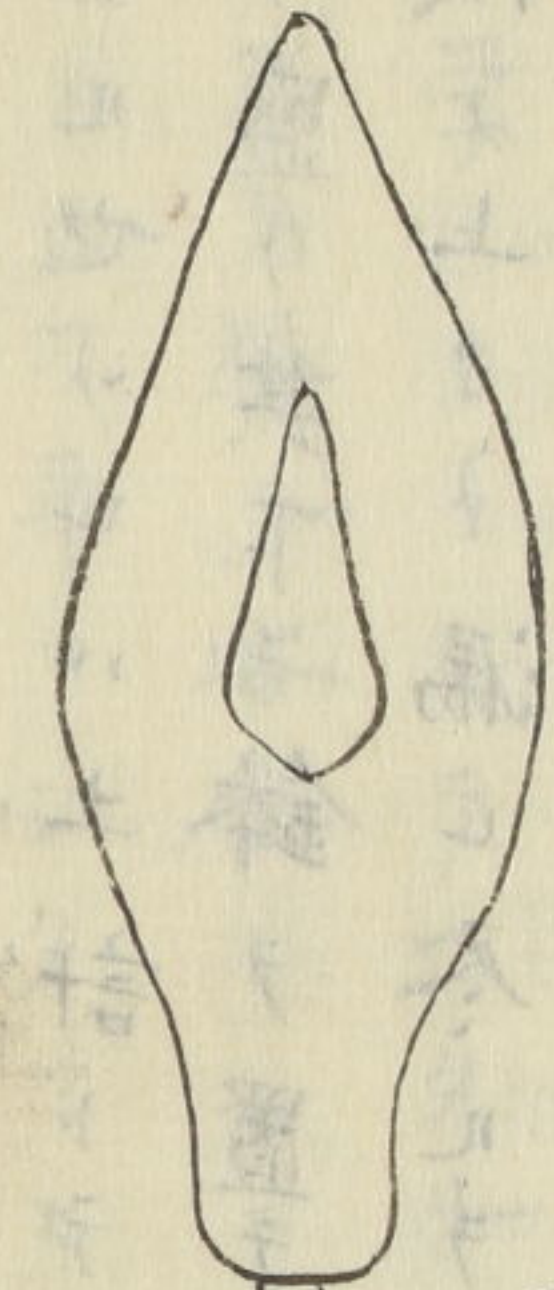
一干該 日本紀神代卷入干天石窟之章ニ天鈿女命  
覆槽置ウケセフミトロカニ覆槽此云干該ウケセ〇〇貞丈干該ハ槽也槽ハ馬ノ  
食器ナリ馬食筭ケ此三字ウマウマケケハ三字ウマウマケハ中畧ニテウ  
ケト云也ウケハ上古ノ稱也中古ヲ子ト云也ウケフ  
子ト書タル書アリ重言ニテ誤也日下部勝美考

一座禪靜座安座 佛家禪宗ノ僧結跏趺座無言不動ニ  
テ心ヲ靜メ觀念スルヲ座禪ト云儒家士モ朱子ノ学

風ヲ傳ル者ハ致敬静ト号シテ座禪ノマ子ヲスル也  
孔子ノ静座セラレシ事論語ニモ家語ニモ見ユズ朱  
子ノ学ハ禪家ヲ交タル儒ナル故座禪ノマ子ヲモス  
ルナリ又神道家ノ徒モ安座ト号シテ座禪ノマ子ヲ  
スル也是ハ天人唯一神道トモ理学神道トモ称シテ  
朱子学ニテコシラヘタル神道家ニハ彼ノ儒者ノ静  
座ノ名ヲ替テ安座ト云テマ子ヲスルナリ上古諸神  
安座ト云フ事ヲシタマヒシ事ハ日本紀古事記古語  
拾遺等ニ見ヘズ心ハ活物ニテ常ニ動キ止ム時ナシ  
俗人ハ心動カザレハ人事ヲ行フ事成ラス心若シ邪  
惡ノ事ニ動キ移ラバ其期ニ臨テ其心ヲ静ムヘシ又

云彼ノ神道者安座巡行ト云事ヲ云安座ハ右ニ云如  
クシテ心ヲ神道ニ縉ルト也巡行トハ安座久シケレ  
ハ返テ心ヲ苦シムル故時ニ立テ左巡リニ巡リ又安  
座スル也ツレハ土計トテ板ニ小キ穴ヲアケ其上ニ  
砂ヲ盛り其下ニ鉢ヲ置テ漏ル、砂ヲラクル也其砂  
ノ板ノ上ヨリ漏レ尽ルヲ度トス砂ノ多少ハ我好ニ  
随フ江戸浅州ニ住ケル神道者橋三喜<sub>駿河惣社宮内</sub>  
ハ能ク安座ヲ修シ得タル人也鼻ノ先ニ木綿ヲ糊ニ  
テ付テ息ノ荒クナルヲ慎テ氣ヲ縉リ也<sub>或書ニ貞丈</sub>  
云巡行ト云モ僧ノ行道ハマ子欲安座巡行共ニ佛家  
ノマ子ヲスル也

一古キ矢鏃 甲州須々原ニ富士山古キ矢ノ根二三持  
 父ル者アリ是ハ右大将頼朝富士ノ裾野ノ狩ノ時ノ  
 矢根也ト云朽木ノ穴ノ中又ハ古畑ノ土中ヨリ掘リ  
 出ス事モアリト云其形モ大サミ左ノ図ノ如シ



一宮巡詣記見 小澤民部所持シタラ  
 播三喜三興ハケル由  
 貞丈云是平根也今ハ伊ノ自  
 又ハサクラノ花ヲスカシニスルヤリ

一軍器縫様 旗母衣幕ノ類一切布帛ヲ以テ作ル軍器  
 ノ縫様ニ幅モ三幅モ縫連ルニハ表ノ方ニ布ノ端ヲ  
 ナシテ又ヒフセ又ヒスルニ布ノ端ヲ左ヘ向ケテ折

伏ヘシ其ニフセ又ヒスベシ耳縫スソ縫何レモ表ノ  
 方ヘ折伏又フベシ幕横幅モ表ヘ布ノ端ヲナシテ  
 又ヒ伏ヌヒハ布ノ端ヲ上ヘ向ケテ折伏ヘシ縫目ヲ  
 表ヘ折伏ルハ進ム道理故用之也右ヘ折伏セ裏ヘ端  
 ヲ折ルハ退ク道理故忌之幕之横幅ノ縫目ノ端ヲ上  
 へ向テ折伏ルハ進ム道理也下ヘ向ルハ退ク道理故  
 忌之皆古ヨリノ定式也又是ヲ縫シムルハ月水ノ穢  
 ナキ女ニ縫シムベシ縫ハ男ノ職分ニマラズ男女ハ  
 陰陽ニテ天地ノ道也神道ニハ女ヲ忌事ナシ只月水  
 ノ穢ヲ忌ム也佛法ニハ女人禁制スルナリ又男女各  
 職分アリ女ノ職分ハ男ハスベララズ又軍器ニ梵字

九字等ヲ書ク事ハ本式ニハ非ズ但人人好ミニ依ル  
ベシ歟子細アリ

一 箴胡籙 箴ノ字古人訓ハヤナグニ後ノ訓ハエビテ  
也和名抄ニ箴和名夜奈久比トアリ後照念院終平装  
束抄ニモヤナクハニ箴ノ字ヲ書ケリ此外古書ニ多  
シエヒテト讀ハ後代ノ事也鎌倉將軍ノ末人代比ヨ  
リハエヒテト云タルカ庭訓往來師玄息法七月八日ノ  
狀ニ箴胡籙ト二名ヲ出セリエヒテト云モ平ヤナグ  
ニモ同事ナル共後ニカツノ形ノ違タルアリ  
一 餅花 宗長記行卷下云早梅枝もききくおけきさうり  
きうと人おきうり行やぐり坊城後ノきうせま

うんとう 物を名云ふのうんとう花ぶらもさきこ  
う枝も足下のさき おお梅々一二アんうせのよさ  
きておほうきあられううりのあまうよ正月  
童部の餅花はけしるねよさきたるをうさひし  
と見ての事なりき宗長法師ハ宗祇法師ノ弟子にて  
文明の比ハ大永年中その人ノ其以既下ワ  
屋のしら花はけてもて何をぶるれらうと知  
一 笹稜煎餅 宗長記行上云人のきやうし籙稜せん  
いニ色とらうきうよ 心うしきや飯のよけさ  
まき粉ハ千秋ふんいし  
一 十團子 同書上云大永四年 十六日境ノ夕迄

宇都の山よぬやどしけ葉屋びつりくの名物十巻  
子と云一抄子よ十行か折々どめらうひびきよき  
こそ夜よ入く居府

一足輕 同書上云折茂風面厚おと落し送下の人を  
皆かぬさむう一のんまきつりて途とうを  
む方をたぐつたくどし侍と物より知人オオてけ  
あつらのつかるを杉と窪田とつ所よ里とく  
ころけいさ 按樵談知要よ足えつる足輕しけ書の  
足輕も合致つる所よ麻をきく 鞍考よびつ事と海世  
よるもたれと足ゆつる山賊郎伏るす所何ぶま  
たるまぐくと代よハなるさしよの好

一焼石 大鏡柳藤時平公下保光 ころ保光大折八条よ  
何のつは肉よまわりのよかものいとるるのうま  
いとおほきんきんわいあひわいあおほきちるを  
はむしひらひさきそまうひやまきやまきりのや  
うよあつたあつとらぬつりてつりてつりて 右日下部  
貞丈云屋きいりち温石也原平盛事記にも足ゆ詠篇  
拔華抄也一巻ぬ〇勝美云詠歌典故侍日記やんよ  
もつりつと受つる〇貞丈云十訓抄も何 諸篇抜華  
一無目堅間小船 日本紀神代卷一卷一書塩土翁来  
無目堅間小船ヲ作テ火火出見尊ヲ乗セテ海中ニ推  
ニ放ツト見タリ舊説ニ篁ノ目ヲヒビト紐ミフサギ

タルヲ無目堅間ト云堅間トハ籠ノ事也海中ニ推放  
ツト云ニヨリテ籠ナレトモ小舩ト云タル也云  
貞丈云籠ハイカホド目ヲ組ミツノテ塞キタリ共水  
漏レ入ラカレ事ナシ籠ヲカタニト云ニヨリミト  
通奇ニ依テ堅間ヲ籠トスル攷舊説誤也目ノ字ニ即  
千間也訓同キ故借用也実ハ無間堅間也間トハ  
也透間ヲ云舩ニスキ間ナキヤウニスキ間ヲ塞ギ堅  
ノタル小舩ヲ無目堅間ノ小舩ト云ス舩ノ堅固ナル  
ヲホメテ云シ日本紀ノ本文并ニ二ツノ一書皆竹籠  
ノトトス是ヤタマヲ籠ノ事トシテ古老ノ語傳シナ  
ルヘシ又一書ニハ無目堅間ノ小舩トアリ是ヲ正ト

スヘシ

一本地垂跡 佛ヲ本地トシ神ヲ垂跡トシ兩部習合ス  
ル下弘法傳教慈覺知證ノ四大師ノ所為ノ由ト部兼  
俱ガ名法要集ニ記シテ兼俱專其説ヲ信用セリ本地  
垂跡ノ説ハ悲華經ニ我滅度ノ後於惡世中現大明神  
廣度衆生トアルヲ本據トシテ是ヲ推シ弘メテ吾國  
ノ神祇ニ悉ク諸佛ヲ配當シテ某ノ佛ガ化テ來テ日  
本ノ某ノ神ニ成テ此日本ニ止リタルヲ垂跡ト云ハ  
ケタル本ノ佛ヲ本地ト云朝廷此説ヲ信用シタマヒ  
シヨリ吾國ノ神祇ハ大概佛ノ扱ニ成リテ神社ハ僧  
徒ノ居處ト成レリ近世儒ノ道ヲ神道ニ交テ唯一神

道ト云テ佛説ヲ除キ去ル徒リ説ニ本地ト云ハタト  
 へバ天照大神也無跡ハ五十鈴宮也應神天皇ハ本地  
 ニメ宇佐ノ宮ハ無跡也ト云此説ニイニメ本地無跡  
 ノ名目ヲ捨テ切テ者也吾カ國人為ニハ佛法ハ瘡毒ノ  
 骨ガラミニ成タル如ク本彼スル下ハ叶ハズ日本國  
 ヲ代ニ武臣ニ押領セラレテ朝廷衰微ニ給ヘルニ神  
 祇ノ崇ニモヤアラム  
 一 黄金二兩 宗長記行下十一月晦日大塚に駿河より  
 孫右衛門上段を之事と云大共黄金貳枚左京 下地 越中  
 左京 又一あ房州右京 五房 是ハ京ノ一ノ一也  
 起流ニを以の何と云 此夜とせ

心いそぎりんうんぬかての心いそむくひ  
 んの黄金令と何ハ砂令ハ何ハけい後河まで  
 ハ金子毎用何ハ何江戶小判を慶長山其より  
 但右ノ黄金を板令と切テ秤目計あり様すハいま  
 だ小判ハ何と云  
 一 筋分亦是厄落 同書云廿五日 廿六年 筋分のお大  
 意うはとす 福を因入りまもの今扱とす  
 一 ちむらひくや鬼をりりし 〇京ハ役おとすと  
 一 年ノ穀課を包く食の夜行よおとすとす  
 一 事とおいふやうに 此時宗長厄落ハかきあきは家ハ  
 一 十代新事後役とすいふおとす 筋分とす

忘字云前古今  
報ノ上後部  
老ぬ又し  
と云ふは  
のむと云ふ

一 除夜靈祭 同書云 古同 除夜よと云ふはちま玉歸る  
るの終るもいつ 花祭 花祭やんよ海の玉と云ふ  
かたしと云ふ 宗長七十九おぼくの故人常陽燒鳥地  
と云ふと云ふ けさそ母乃と云ふと云ふ  
と云ふと云ふ 按よ十二月晦日靈祭松葉子つ  
色く事おと云ふ 昔々十二月晦日之組と云ふと云ふ  
是等し七月十五日々 齋鬼祭し 孟蒙を合と云  
一 神記美称 日本紀古事記古語拾遺等ハ後代ノ人が  
上世ノ神祇ノ事ヲ記シタルモノ故崇敬シテ每事毎  
物美称ヲ冠ラシメテ言フ也其美称多シ○天ノ何高  
何ト云ハ高上ヲ以テ美称トス○神何ト云ハ神妙不

測ヲ以テ美称トス○稜威何嚴何賢何ト云ハ神威ノ  
畏ルベキヲ以テ美称トス 遊牙モ賢牙也○齋何何御  
何湯津何ト云ハ清潔ヲ以テ美称トス 御ハイミノ畧  
語也 文字 湯ハ清ノ畧語ヨ也ヨノ轉工也 相通  
釋日本紀ニ云湯者是潔清也津者是語助也 齋 齋ハ  
潔○ユヅノツテクシ○ユヅノカツテノキ○ユヅイ  
ハムラ○祝詞ニユマハリ齋ノ字ユマハリトヨムキ  
ヨマハリト云モ同シ○廣何羽何ト云ハ廣弘ヲ以  
テ美称トス 羽ハ廣キヲ云○大何太何ト云ハ莫大  
甚太ヲ以テ美称トス○豊何ト云ハ豊饒ヲ以テ美称  
トス○日何ト云ハ光輝ヲ以テ美称トス○瑞何玉何



ト云ハ潤澤ヲ以テ美稱トスル也瑞ハ水也文字ニ○  
磐何ト云ハ堅固不易ヲ美稱トスル也○真何ト云ハ  
正真不雜ヲ以テ美稱トス○生何ト云ハ生成不窮ヲ  
以テ美稱トス○瓊何ト云ハ花廉彩色ヲ以テ美稱ト  
ス瓊ハ丹也文字ニ拘ラズ上古物ヲ彩ルニ必ス丹○  
八何ト云ハ增長無限ヲ以テ美稱トスハハ彌也ハヤ  
リヤト或ハ希シニハ數ヲ用ル事有リ夫レ共彌ヲハニ  
寓スル也器物等ヲ制スルニ形ニ彌ヲ表スルナリナリ  
ズ故ニハ數ヲ借リテ彌ヲ寓スル事アリハハ數目ノ  
美稱也惣テ文字ニ拘ラス詞ヲ以テ本トス○  
一忌君諱字省點畫近世漢土ノ書渡來ノ書ニ先王ノ

諱ノ字ヲバ憚忌テ點畫ヲ闕キ省テ用之如此スル事  
ハ元明ノ比ヨリ始ル故上古ノ書ニハ此事ナキ故吾  
國史古記ニ先王ノ諱ノ字點畫ヲ闕キ省ク事ナシ公  
令ニモ此漢土ニテハ昔ハ諱字ヲハ用ズ別字ヲ以テ  
代ヘ用ヒ事アリト見エ然共論語ニ周王ノ諱ノ字  
ヲ避ケズ別字ヲ代ヘ用ルモ後ノ事故吾朝ノ國史ニ  
先王ノ諱ノ字ヲ憚ラスニテ用之又點畫ヲ闕キ省ク  
事モナシ吾朝ハ唐朝ノ風ヲ移シ用ラレタル也續日  
本紀桓武天皇延曆四年五月丁酉詔曰臣子之禮必避  
君父諱比者先帝御名及朕之諱公稱觸犯猶不忘聞自  
今以後宜並改避於是改姓白髮部為眞髮部山部為山

ト見タルハ臣下ノ姓名ニ先王當皇ノ御諱ヲ犯ス事  
ヲ禁セラレシ也文書言語ノ禁ニハアラス近頃儒学  
ノ徒文ヲ著スニ家ヲ家トシ康トシ吉ヲ吉トシ宗ヲ  
宗トシ重ヲ重トシ治ヲ治トスルハ將軍家ノ御諱  
字ヲ憚テ點畫ヲ省クト也是近世渡来ノ書ニ倣ヘル  
也然レ共朝廷先王ノ御諱近ク今皇ノ御諱ノ字ヲバ  
憚ラズ一ヲ知テニヲ知ラズ左ヲ知テ右ヲ知ラズト  
云ベシ豈儒ト云ハニヤ

一太占タチ 神代ノ占也鹿ノ肩骨ヲ扱キテ焼テ占フ也神  
代ニハト龜トト馬ノ占ナドハナシ太占ノ法今ハ絶タリ  
ト思ヒシニ上野國一宮ヲキサキ買前大明神へ橋三喜ト云神

道者參詣ス元祿九年六月廿日其社ニ鹿ノ肩骨ヲ扱テ薄ク  
スリ淨火ヲ以テ占ヲ行フ事傳へ来ルノ由神主談リ  
シ由神主ハ一宮修理同職部也右三喜一宮巡詣記卷  
之七ニ見ヘタリ

一鯨鬚ヒナギ制器 禮記ノ玉藻ニ笏ノ制ヲ云ニ天子以球玉  
諸侯以象大夫以魚須ヒナギ 文斫ヒナギトアリ此魚須ハ鯨ノ  
鬚ナルヘシ漢土ニテハ上代ヨリ鯨須ヲ以テ器ヲ制  
スル事アリシ也吾國上古ニハ笏ニテモ何ニテモ鯨  
ノ須ニテ器ヲ制スルトナシ後代近世ニ到テ鯨鬚ヲ  
用ルトアリサレバ鯨尺ヒナギノサシラモナドハ近世ノ制作  
ト思ハル也古代ノ書ニハ見エズ

一伊勢神宮之制 伊勢神宮ノ作り様ハ茅葺ニテ千木  
カサキ 榿木アリ千木榿木ハ風ノ茅ヲ吹破ラニテ押ヘル為  
ノ料也如此茅屋ニスルハ花美ノ奢ヲ禁シ質素ヲ  
用ヒ儉約ヲスベキ事ヲ万民ニ教ヘ示シ給フベキ為  
メ也ト云説アリ是故実ヲ知ラヌ者ノ説也万民ニ教  
ヘ示ス為メニ宮ヲ鹿相ニ作レト大神ノ託宣有リニ  
事ハ日本紀ニモ古事記ニモ古語拾遺ニモ見エス上  
古ハ天子ノ御殿モ茅葺ニテ千木堅魚木アリシナリ  
雄略天皇ノ御代志幾之大縣主ガ家ニ堅魚木ヲ上シ  
天皇御覽シテ天皇ノ御舎ニ似セテ作りタリトテ怒  
リテ其家ヲ燒キノトシ給ヒシ事古事記ニ見ヘタ

リ上古ハ天子ノ御殿伊勢ノ宮作りノ如シ末世ニ至  
ルマデ伊勢カノ神宮ヲハ上古ノ屋作りノ風ヲ改メス  
シテ作ル也後代天照大神ノ万民ヲ教ヘ給フ道也ト  
号シテ神道ト云一道ヲ新作シテモテハヤス者共伊  
勢神宮ノ茅葺ヲモ彼ノ教ノ道ノ方ニ取ナシテ説ヲ  
造レル也

一貴字ムキト訓 大己貴又日女貴ト云有リ貴字ムキ  
トヨム和名抄国郡部ニ大和国城上郡ノ郷名ニ大神  
ト云ニ於保無知ト訓ヲ付タリ然レニ神名一貴ノ字  
ヲムキトヨムハ即チ神ト云ニ同シ  
一百濟國之王仁先祖 續日本紀卷第四十桓武天皇延

曆十年夏四月戊戌紀曰最第等言漢高帝之後曰鸞鸞  
之後王狗轉至百濟久素王持聖朝遣使徵召文人久素  
王即以狗孫王仁貢焉是又武生等之祖也高帝祖也漢  
一 中臣菟 菟神 近江国栗本郡男山郷 櫻谷在り所  
祭ノ神一座瀬織津姫命也延喜式大菟詞ニハ佐久那  
太理トアリ是サクラタニヲ古言ニハサクナリト  
云シ也サクラタニノ轉語ナリ文徳実録ニハ近江国  
散久難度神トアリ位袍ノニ一八雲御抄ニハサク  
ラタニト有テ注ニ菟詞有禱トアリ又菟詞ニ大津ノ  
名アリ是モ近江国ニアリ賀茂真淵ガ菟詞ハ近江ノ  
朝廷ニ作ルナラント云サモアルベシ近江朝廷ハ天

智天皇也近江志賀大津ノ宮也此時新作ニハ非ス舊  
詞ヲ修補セラレシナルベシ古事記仲哀記ニ見タル  
国ノ大菟ノ詞ト見ユ又万葉集ニ人麻呂ノ歌菟詞ニ  
似タリ既ニ上ニ記シヌ  
一 中臣菟盡物 中臣菟詞ニ盡物為罪トアリ此盡物ノ  
事諸説區々也案續日本紀卷廿九称徳天皇神護景雲  
三年五月丙申縣大養姉等坐巫盡配流詔曰中氷上  
鹽燒我兒志計志麻呂乎天日嗣止為止謀掛畏天皇  
大御髮乎盜給五波利岐多奈岐佐保川乃鬮髀入互大  
宮内示持參来互厭魅為流三度利世云上ニ巫盡ト  
アリ此詔ニ厭魅トアリ是マジモ人也人ヲ咒咀スル

ヲ云也神代ニハ如此事ハアルマシケレ共後代ニハ  
如此事モアリ此板詞ハ天智ノ朝ニ舊辭ヲ修補セラ  
レシトシバ其比ニハアルナルベシサレバ是モ罪ノ  
條目ニ入ラレシナリ

一 鱒尾琴ササノコト 森図書問云春臺ノ經濟録云瑟ヲハ昔ハ鱒  
尾琴ト名ツケテ樂ニ用ヒタリト云傳レ共世ニ傳ハ  
テス云々此事田安ノ御家臣国学ノ士ニ尋テ共不知  
ト云如何予答云国史及舊書ニ曾テ所見ナシ本文ノ  
語疑ベシ樂家ナドノ云傳ノミニテ史籍ニハ見サル  
事ナルヲ其云傳ヲ信用シテ記シタルニテハアラザ  
ルヤ但徠春臺ノ徒ハ吾国ノ事ニハ甚疎キ輩也サレ

一 疑ベシ彼二人適吾国ノ事ヲ云ニハ違タル事有リ

一 文房四賢 或四友ト云 劉司空誤字ヲ削リ 胡補闕削テ毛立タル

ヲ治ル糊ナリ 温平章糊ノ温ヲ燥シ 牙光祿牙ノ光ヲ所

ヲ出ス牙別ニ因アリ

一 棧敷正字 棧敷ト書ハ俗書也 正字ハ假敷ト書也 日

本書紀神代 假敷自注ニ云 假敷此云佐受ナリトアリ古事

記ニモ佐受岐トアリ古ハサズキト云タルヲ後代諸

轉シテサシキト云ニ付テ俗ニ棧敷ト書也 厥度同字

也字彙ニ度閣板為之所以藏食物也トアリ見物ノ棧

敷ハ食物ヲ置ク棚石如シ故ニ假敷ト書テサズキト

ヨム也○貞丈按見物ノ棧敷ハ觀閣ト書テ其義直ニ

通スベシ  
一 官途 只官ノ事也 京都將軍ノ時代ニハ公家ニテモ  
武家ニテモ官ノ事ヲ官途ト云ヒ也 途ノ字ヲ付ルハ  
其時世ノ俗語也 其時代ノ書ニハ官途受領トアリ官  
途ハ京官ヲ云フ受領ハ諸國司ヲ云惣テ時代ニ依テ  
其時世ニ云讀シタル俗語アリソレヲ知ラザレバ  
古書ヲ讀ムニ通シ難キ事アリ今世近年人ト對談ス  
ル事ヲカケアフト云。事ノ様子ヲフリアヒト云 詞ト  
モ公ノ役人等云也 是モ年曆途ニ經テ後ハ不審スル  
人アルベシ  
一 尸喰死人 土佐光茂カ繪カケル病草ト云繪ニハ廿

マサマノ奇病ノ形ヲソ画ケル 其中ニ若キ女ノ乞食  
ヤウノ者道ノ傍ノ死人ヲ喰フサマヲ画ケリ有ベキ  
事トモ思ハザリシニ五代帝皇物語ニ正嘉三年ノ春  
比ヨリ世ノ中ニ疫病オビタシクハヤリテ下藤共  
ハ病ニヌ家ナシ川原ナドハ路モナキホト死骸ニ今  
テ浅マシキ事ニテ侍リキ畧三月廿六日改元アリテ  
正元ト改メテル 正月上旬ノ比死人ヲ喰小居出来テ  
マロヅノ所ニテクソト云ホドニ十四五斗ナル小尼  
内野ヨリ朱雀ノ大路ヲ南サマヘ行トテマサニ死人  
ノ上ニ乗居テムシリ喰フ目モアテラレズ古ケル  
童部共シリサキニ立テ打キサイナメハ鳥羽ノ方ヘ

マカリケル後ハイカビナリヌラニ云云 此事百練抄  
ニモ見ヘタルト覺エ怪敷事ナリ

一 鞭竹 草津ノ鞭竹ハ美濃ヨリ出ル也本ハ草津ノ土

産ニマラズ 水口ノ柳行李ハ但馬ヨリ京ヘ出シ京ニ

テ縁ヲ付テ水口ヘ出ス有馬ヨリ打テ出ス小刀庵丁

ノ類京ニテ銘ヲ切テ出ス由或雜篇ニ見ヘタリ此類

猶多カルベシ 武州ノ浅州海苔ハ品川ニテ乾ニテ浅

州ヘ送ルヲ人ニ浅州ノ土産ト思ヘリ

一 孔雀尾 本草細目云気味有毒宗頤曰不可入目令人

昏翳○張邦基墨莊漫録云孔雀毛著龍腦則相綴禁中

以翠尾作帚每幸諸閣擲龍腦以辟穢過則以翠尾掃之

皆聚無有遺者出谷警集 右忠寄抄出

一斤色 當世斤色ト云ハ練ノ事也色ハ何色ト限ラス

練ノ地尉目地位ノ亘キヲ片色ト云 紅ノ片色白片色

桃色片色鉄色片色ナド、云此事京都吳服屋菱屋新

兵衛ニ問シニ彼ノ者ノ答右ノ如シ○貞丈云今世練

緯ヲ下畧シテ練ト云 經ハ生糸ニテ緯ハ練糸ニテ織

ユヘ練緯ト云今ハ練緯ノ厚キヲ片色ト云 色ニ糸

ヲ染織タルヲ尉目ト云フ白キ片色ヲ深テ何色ノ片

色ト云ソノイロニ非ズ練緯ノ薄ク柔カナルヲ練下

バリ云皆今世ノ詞也練貫ト書クハ假リ字ナリ古

ニハテノ子リヌキヲシメノ子リヌキト云

一 法令錦 木綿ヲ京都ニテハモノニワタトモ木綿ナリ  
又タウラタ共云唐江戸ニテハホウレドワタト云法

也綿法令ハ大和国奈良ノ地名也此地ニテ作ル才錦ヲ

多ク江戸へ出ス也然ルニ勢州其外ノ国ニテ作ルヲ

モ皆法令綿トヨビ習ハセリ是モ右ノ菱屋カ説

一 カタクリ 或書ニ云其形モ花モ百合ニ似テ紫ノ花

サク葉ハホバコニ似タリ正月ノ此花サク故初ニ

リノ名アリ花ノ時ハイマダ葉ナシ志寄云葉ノ同ニ

不見人ノ説也依テウハエリ共名ツク老女ノ齒ナキ

リ万葉及新撰六帖ニカタカエノ花ト詠セシモ是ナ

リトゾ

一 鯉 是きく系云藻余の海ぬういとと奥を彼さうの

ひまはさき双なきおめてけはとてるひまの花もたれ

も藻余のひまの花もたれ

し世またうのうぐま人のちる物さりゆらきさ

ひとも下放もくりんまうらとてゆりしまのやうら

アさかやののもせのまなまとさるまても入

ふりのまもしもゆき同書文版抄云野道春作ツ草ノ注野

リ挺鯉と云字本州細目韻書等ニ命明るハ海篇心

鏡ニ鯉音堅大鯛也とり万葉集九水江之浦島兒

之堅魚釣鯉釣矜及七日といテ又式部太輔石上堅

魚朝臣といフ人の被も同八ノのま倭名集也



鯉魚 初加豆 少何の何々鯉と堅魚とも幸の貞丈按

延喜式 堅魚トアリ和名抄ニ鯉魚唐韻云鯉音堅漢

加豆字式大鯛也大日鯛小日鯛音野王按鯛音同鱈魚

也鱈魚見下文今案可又鱈ノ注本州云鱈魚上ノ音礼

味耳寒無毒者也陶隱居注云鱈今作鱈字也ト見ヘタ

リ玉篇ニ元鱈右ノ文トモヲ合セ考ルニカツヲ上古

ハ生ニテ食スル事ナシ毒アリテ醉シムル事アルヲ

恐ルレバ也故ニ乾テ脯ト成シテ因々ヨリ貢獻セリ

脯トスレハ毒ナキ故ニ天子ノ供御ニモ用ラル其脯

ヲカツヲト云也カツヲト云ハカタウヲノ釣音ハ語也ウ

ツ音切也乾シ堅メタル魚トレバカタウヲト云フヲ釣

メテカツヲト云ニ依テ堅魚ト書也後ニ堅魚ノ二字

ヲ一ツニ合セテ鯉ノ字ヲ作りタルカ不慮ニ漢字ノ

鯉ノ字ト同様ニ出来タル也我國ノ鯉ノ字ト漢字ノ

鯉ト元来別物ニテ字躰ノ同キナリ去レバ和名抄ニ

此事ニ心ツカズシテ唐韻ノ大鯛也ト云注ヲ引用サ

レハ源順ガ誤也又古ハ乾タルヲカツヲト云タルヲ

今ハ生ナルヲカツヲト云ヒ乾シタルヲカツヲブシ

ト云フ也フシハホシノ訛也ホシハホシ、脯ノ字也ホシ

シハホシシシノ畧語也乾肉ト云義也サレバカツヲ

ブシト云ハ重言也乾テ堅キユヘカタウヲト云フ釣

メテアツヲト云テレバカツヲホシト云ニハ及ザル

也生ナル時モ古ハ必ズ乾テナラデハ食ザル故カツ  
ヲト云ニナルヘシ今ナマツヲト云ハ其差別ヲ云  
コワケタル也又朝鮮ニテハカツヲニ松魚ノ二字ヲ  
用ルト云説アリ肉ノ色松ノ節ノ赤キニ似タル故松  
魚ト云トゾ正徳ノ来聘ノ朝鮮人ハ鱈ヲ見テ松魚也  
ト云シトゾ是モ肉赤キ者也

一 柗箱 續日本紀卷九元正天皇養老六年十月丙戌  
ノ記云銅鏡器一百六十八柳箱八十三トアリ柳箱ハ  
古キ物也延喜式ニ見ヘタル趣キ今モ在ル所ノ柗行  
李ト見エ柗木ヲ三角ニ削リ編タルハ後ノ製ナルベ  
シ延喜式ニ編ル  
糸ノナリ

一 日本書紀題号 日本ノ二字ハ漢土ニ史記漢書唐書  
ノ史アルニ對シテ日本ノ二字ヲ置タル也書紀ノ二  
字ハ紀ヲ書スト去義ニテ日本ノ世ノ事紀ヲ書ス  
也俗ニ云ハバ日本ノ年代記ト云事也紀ノ字玉篇ニ  
居擬ノ切十二年也トアリ小補韻會ニモ十二年ヲ曰  
一紀取歳星一周トアリ子歳ヨリ亥歳マデ一周ヲ紀  
ト云也舊説ニ書紀ノ二字ヲ相連子テニルスト云義  
ニ取テフシト訓ニ来レリ小補韻會紀ノ字ノ下ニ記  
也トモ注シタレバニルストヨムベキト勿論ナレド  
ニルスノ義ニ書紀ト相連テハ重言ニテ古雅ナラズ  
年紀ノ紀トスルハ勝レリ續日本紀以下ノ紀ノ字モ

年紀ノ紀ト見ベシ

一 渤海 續日本紀卷十 聖武天皇神龜四年十二月丙申  
記曰 渤海郡者舊高麗國也 淡海朝廷七年冬十月唐將  
李勣代滅高麗國 其後朝貢久絶矣 至是渤海郡王遣寧  
遠將軍高仁義等二十四人朝聘 而着蝦夷境

一 アマヘテト云 詞古今差別 采花物語浦くわりの  
の夷よけの事 此ハ事トハ伊用ノ流羅セテカ  
告ケ申シタ 此ハ事トハ伊用ノ流羅セテカ  
ルヲ云フ 誠なる平親信といふ人のみいとあまの  
阿らりアヤ右の物たよりといひくうらん  
ひありつ 隠後なるためなる阿らりくうらん  
おらりる事 阿らりるを おほやけの臣なる

やまきるのやあむくうとてか階も後こそうけさむく  
ろごびのひよえりともやよいまうりさむを親行終片  
ソはこよたがもあうこうよはまうらあほけぬく  
つまぬくもあふまかやのの物我うなごの入れ子  
なごのひおんまま 阿らりるがふまのえひも  
まらめあむくう なるまま事といひあ  
てんおむひひ あむくうはなげまをあむくうはな  
あむくうはなげまをあむくうはな ぬま  
してまげにうらま 此あまのまをい  
まて父をあふ先伝く せく あむくうはな  
のあらすの物詞也 阿らま あむくうはな  
音母

此古の詞をいふもの事にあまふ家といふ  
今世に俗語より兒の父母に申すおやと阿  
う教訓受た家まゝと申すあまふと申すは食物  
乃味ふたと申すあやと若くも辛くも思ふ人其く  
ひく家まゝと申すとりよえ牙教の方より子をい  
めんあまくと申す其子おやと阿まくと申す是  
と今俗よりあまえと申すあまへれと申す古の詞は  
あまつるとはたきにそまたり古今の詞乃意味  
とりまといふこと古書の意味は通じかきん記  
一 蹴類 大明二年癸卯秋九月猫捕鼠来置而不取熟視  
則長三寸許非家鼠也鬚鼻目皮毛共蹴而耳前脚長尾

家鼠也甚恠或曰予亦往年見此物而恠久矣是蹴之一  
種乎或其壯乎或其幼者如此而後及長變形狀乎未詳  
欲問格物之士矣

一 燕澤碑 陸奥州宮城郡燕澤碑多用古字巨讀也書家  
東江能考釋字或有古字或有省文或誤作也東江釋字  
而後可讀然文義巨解予熟考文辭甚拙叙詔或疎或刺  
故巨解強解則勸善教戒詔也其解別録今不述

一 腹白腹黒 古書ニ腹白腹黒ト云事アリ腹ハ心腹共  
腹心共ツケテ心ハ胸也即腹ト云ハ心ヲ指テ云心  
清ク正直ナルヲ腹白ト云也漢土ノ書ニ赤心ト云ニ  
同ニ赤キハクラキトナキヲ云フ又心キタナクウニ

ロクテキヲ腹黒ト云漢土ノ書ニ黒心ト云ニ同シ  
一ヤニヤアト云詞 俗ニ歌舞ナドヲ褒メテヤニヤア  
ト云変ヤアノ轉語也ヤアノ本語ハア、ア  
、也アトヤ相通ノ音也サレバア、ア、轉ジテヤア  
ヤアトナリヤアノ重子云フガ連声ニ引レテヤ  
ニヤアトナリタル也ア、ハ嗚呼ノ二字ニテ感歎  
詞也ヤアノモヤニヤモ同義也右答忠寄之問  
一サニテト云詞 俗語ニ事ヲシサニテ物ヲ書サニテ  
飯ヲ喰サニテ火ヲタキサニテナド、云フハ皆全ク  
シトゲズ半途ニシテ止ムヲ云サシハ。サシオクノ畧  
語也畧ノ字サシオクトヨム右ノ俗語ニハ羊止ノ二

字ヲ用テサニテトヨムベシ

一カケテト云詞 俗語ニ事ヲシカケテ物ヲ書カケテ  
ナト云モ前ニ謂フ所ノサニテト云ニ同ク全クシト  
ゲズ半途ナルリ云カケテト云ハ掛テノ意也中ニカ  
、リテ落着サル義也

一ナマジヒト云詞 ナマトハ熟セサル也シヒハ強ル  
也心ニ熟ト受ケ會ズシテ強テスルヲナマシヒト云  
也字書ニ愁魚僅ノ切強ル也トアリ音ニ訓或ハ救  
ニ作ル俗ニ愁ニ作ルハ誤也強ハ。シヒ也俗ノアナソ  
ナマナカト云詞ニナマハ熟セサル也ナカハ半也菓  
ニタトヘテ云ハバイマダ熟セズシテナカハナリ意

ナリ未熟ノ字ニ當ル 別也一ツニトナマナカハ

一穀價 續日本紀卷三三 元明天皇和銅四年五月己未以

穀六升當錢一文ト見エタリ 穀ハモミ米也六升ヲ磨

テ白米ニシ三升也白米三升ノ代一文也上古世ノ當

ルヲ知ルベシ 今天明三年癸卯夏ヨリ白米五合六合

也古今雲泥ナリ 右上古ノ穀ノ價ヲ以テ方物ノ代下

直ナルヲ押テ知ルベシサレバ世富テ能治レリ

一布價 右同書同五年閏十二月辛丑朔 中畧 諸国所送

調庸等物以錢換宜以錢五文准布一常ト見タリ字書

ニ八尺為尋倍尋為常アリ然レハ布一常ハ二丈八尺

也二丈六尺ニテ代錢五文ナリ上古世ノ富ヲ推考ベ

シ今世布一端二丈六尺ニテ代銀二十匁三十匁也古

今大遠也後代兵乱度々有ニ付テ世貧ニ成物高直ニ

ナル

一出舉 キス 古書ニ米錢等ニ出舉ト云フ事アリ是ハ米

錢等ヲ多ク出シテ世人ニ借シテ利ヲ取ル事ヲ云出

ハ米錢等ヲ此方ヨリ出ス也舉ハ彼方ヨリ利足ヲ取

リ舉ル也貞永式目ニ云此二字アリ出字 此方ヨリ出

也彼方ヨリ出スハ音シエツ也出

一 小野毛人名訓 蝦夷ヲ毛人トモ云ニ依テ小野毛人

ヲモエシトヨムヘシト云説アリ誤也ケビトヨ

ムベシ 續日本紀卷六 元明天皇和銅七年夏四月辛未

中納言從三位兼中務卿勳三等小野朝臣毛野薨ハハ治  
田朝臣大德冠妹イモコ子之孫小野中毛人之子也トアリ其  
子ノ名毛野ト号スルヲ以テ其父ノ名ケビト云ヲ  
知ルベシ

一 天下貧富人情曲直 君上利ヲ貪ヒキホル政アレハ天下貧  
ニシテ人情曲ル君上賤ヲ散シテ貪ラザレバ天下富  
テ人情直也人情曲レハ治マラズ下民上ヲ恨ル心生  
ニテ惡謀ヲ巧ミ罪人多シ人情直ナレハ能ク治リ下  
民上ヲ貴ビ懷イキ善行ヲナス治乱ハ人情ノ曲直ヨリ  
生ズ人情ノ曲直ハ天下ノ貧富ヨリ生ズ天下ノ貧富  
ハ政ノ貪廉ヨリ生ズ政ノ貪廉ハ有司ノ賢愚ヨリ生

ズ有司ノ賢愚ハ君上ノ明闇ヨリ生ズ君上ノ明闇ハ  
学文ト無学ヨリ生ズ学文ト無学ハ君上幼稚ノ時ノ  
教育ヨリ生ズ然レトモ幼稚ニシテ学文ヲ忌ミキラ  
ヒテ徒ニ遊フ事ヲノミ好ムハ母ノ胎中ヨリ受得タ  
ル下愚ナレバ人君ノ器ニアラズ上古ハ和漢共三人  
君ノ器ニ非ル人ヲバ天下ノ君トセズ  
一 結解十ニ 先年長鳥帽子ニ記ニ又猶又是ヲ此ニ記  
ス道遙院実隆公ノ高野詣記ニ云 紀伊の川をわたり  
中畧 此道こよみおきくして十八丁の坂を四十八  
町より一里のをきりあしりつゝ後ニ結解ありと云  
やいふとて周柱法師の戯ノ 五年とて足はくも

如くぬきより結解るるりよの道也 貞丈云  
右れ地名よりは結解るるをけいけいなりと云む坂  
をく経るを也るゆ道なりと云む志げけけけけ  
志げけけと其昔ハ字音少くケイナシと云む  
志げけけ結を志げけけ解ハと云ふし志げけけ  
なくと云ふともかくいひまことかふつのもを志  
げけけと云志げけけの志めけけけの異音し  
一 織田信雄 今の人ノフヲト云ハ誤也本ハノブヨシ  
也永禄ノ御湯殿日記ニ今日織田乃より余内トア  
ルハ信雄也と村井敬義談りキ 貞丈云予カ同僚ニ  
昔ノ土方勘兵衛カ嫡家アリ昔勘兵衛ガ信雄ヨリ一

字ヲ賜リシトテ代々雄ノ字ヲ通り字トス今ノ土方  
氏助亥之ガ實名雄忠ト号ス先祖ヨリ雄ノ字ヨシト唱  
来レリ  
一 タハラゴトコラコ海ナ鼠ノ乾ハシタル也漢土ノ書ニハ  
海參トアリ功能アルモノナレバ人參ニタトヘテ海  
參ト云日本ニテハ昔ヨリ海ナ鼠ノ字ヲ用來レリ和名  
抄ニ崔禹錫食經ニ云海ナ鼠似ト蛭而大者也古和名トアリ。コ  
ト云カ本名也丸ノマハニテ乾シタルヲ熬海ナ鼠ト云  
海ナ鼠ヲ煮シバ縮リテ短クナルソレヲ乾シタルユヘ  
熬海ナ鼠ト云ナルベシ其形丸ク少細長ク糸俵ノ形ノ  
如クナルユヘ。タハラゴト名付テ正月ノ祝物ニ用ル



車庵丁家ノ古書ニアリ米俵ハ人ノ食ヲ納ル物ニテ  
メデタキ物ユヘタハラコト云名ヲ取テ祝ニ用ル也  
串ニ刺シ梯ノ如クシテ乾タルヲ串海荒ト云ナマナ  
ルヲ生海荒ト云後代熬海荒見及バズ串海荒ヲイリ  
コ共タハラコ共云テ用之也今世奥州ヨリ金海荒ト  
云物出ル奥州ノ金花山ノ下ノ海ヨリ出ル海荒ヲ乾  
シタル也其形米俵ニ似タリ是古ニ熬海荒トモタハ  
ラコトモ云シ製ヘタルベシ然レトモ名ヲ金海荒ト  
云ユヘ熬海荒共タハラコトモ云事ヲ人知ラズ金海  
荒ハ生ナル時ヨリ如此ノ形也ト思フハ非也常ノ海  
荒ノ如ク形長ケレハ熬海荒ニ製スルユヘニ形ナ俵

ノ如クナル也

一景清家致 尾張国海東郡馬島村明眼院ニ白山神社  
アリ社内ニ古鏡アリ相傳フ悪七兵衛景清カ鏡也ト  
云其鏡ノ因ヲ尾張ノ人ノ持タルヲ乞テ寫シ又其鏡  
ニ車輪ノ致ノ金物アリ其後或人ノ談リシハ信濃国  
ニ景清ノ建立シタル古寺アリ堂ニ車輪ノ致付タル  
金モノ有リト云此事寺ヲ見シ人ニ直ニ聞カズ人傳  
ニ聞シ事ナレハ郡村ノ名モ寺ノ名モ委ク尋子ラレ  
ズ詳カナデサレ共景清カ致車輪ニテ有ル事ハ彼鏡  
ノ致ニ符合セリ

一因歌得名 吾山四話載タリ 越谷法橋 吾山俳諧  
ノ連歌ノ判者ナリ

トとえの少将

後成女

トとえよ思ひきえりし煙々海好きとせれんを思ひ  
ホとくらし丹後 宣徳院丹後 教母方  
教母女

ワとまうと経取の秋りよと好く浦よと心月かえりし

沖乃石の澄波

二條院澄波教母

オと神の沙千よんえぬ沖のるれ人もさし縁なく同と好く

オと紫の加賀

侍賢門院女房

カとてとくさひ一事よオと紫のころころちかちかせんよ

侍者の小侍後

河原局 八幡光信  
侍母女

ケとりのよちりかひのきよみけにちぬり道のきとよのへ

そのういのき人

徳大寺定定女房

コとふと君りしひえをたきのきさしとむと イカサシ

初善の傍心

白福寺花林院初善 縁

クとひと海りれくをきんし侍し初善れとらをすれ

クと田の松河

松河法師

クとやと田の向やち勝を氷とくしりけさのきと

クと松の善好

善好法師

クとまうこれ也也のき紫とちね松よちかちとちのきと

菅の紫れ浄辨

浄弁法師

クと水の氷またと菅れ紫よりちねとち浦風とよく

徳也の慶運

慶運法師

クと山の子孫れみひとちりつちかちかちとてく

日比の正廣

招月庵正徹門人

こまねくまねくや月のすまぬし日比の神は海のとめて

花草の宮内卿

後漢云此初ノ英文字とオキワツラヒテ宮内卿  
吐き出すは血、其文字若草ノキニ此宮内卿と云

うそくこくや庭の縁をんらよ何とてえも。花のよ草

浦の内侍

伊賀あね

以下名字  
抄に載り

たはさふ波のまよる浦くも何れんめれまひうあづま

下とえの内侍

下とえの内侍  
下とえの内侍

月内侍

あまひく海をのこまややワのトとえの煙やうし

岩もあね

サ将

あまも君ちあしをりまうしあも。氷の色くまね

一セメテト云内 一セメテモ又セメテモノ事ニナド、

俗語ニ云フ古歌ニモイトセメテナド云セメテハセ

マリテし通ノ字又通ノ字也色ノ様ニ。トヤカリヤ

ト。思ヒナガラセドモ何トモスベキヤラナク。思ヒセ

マリタルヲセメテト云也

一ヨコクセ 候名弟子をよむ。さぶ。詩ノまろ

えんぶとよむ。えあれなたまとの類はえれ

ん。あまのい。ん。も。ふ。も。音相通

也。あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。

あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。

あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。

あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。

あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。あまのい。

うみみし

一ヒサカタノ形アラガ子ノ地<sup>ツテ</sup> ヒサカタハ天ノ枕<sup>ツテ</sup> 詞也天地ヲホメタル  
形圓ニシテ<sup>ユルノ形ノ半圓ニ見</sup> 土地山海ヲ始メ万物  
ヲ包ミ括テ漏サズ<sup>崩レズ</sup> 幾千万年モ堅固ニ  
シテ変セザル物ナレバ久シク堅キト云<sup>莫ニテヒサ</sup>  
カタノアマト云<sup>日月星ノ類ニ作物ナレバ</sup> アラガ  
子ノツキト云<sup>旧説ニハ地ヨリ</sup> 金銀銅鉄ノアラガ  
子ヲ生ズル故アラガ子ト云<sup>アラガ子ト云</sup> アラガ子  
○貞丈按此旧説狭ク小シ誤也アラガ子<sup>カノ字ニゴ</sup>  
文字ニハ生根ト書ベシ生ノ字アラトヨム也日本紀

ノ神代紀ニ生ノ字ヲアレマストヨミ来シリ神ノ御  
兒ヲ生ミタマフヲ云ナリ生ヲアレト云ハ有ルト  
義同シ今マデ無キ物ノ生シ出来テコトニ有ル也ア  
ラ。アリ。アル。アレ。アロ。皆音相通也アラガ子ハ生カ根  
ト云義ニテアリトアラユル<sup>万物ハ悉ク</sup> 地ヨリ生ジ  
テ地ニ付テ成長スル也サレバ<sup>生ガ根ノ</sup> 地ト云也万  
物ヲ生スル根本ト云フ事也天ハ久ク堅キヲホメテ  
アラガ子ノツキト云フ也

一ハフルト云詞 ハフレ。ハフラヤシ。ハフリ等皆同ニ  
放ノ字ナリ物ヲツナキ置タルカ放レタルヤラナル  
意也源氏物語若紫のそよ心よほらきて<sup>ねくこころ</sup>



て後、造りたる段に用づるに、此種にきまり、又、梅、  
小羽織、ハ、十通の裏、移り、する物、室町屋の、ハ、十通  
と、之、腹、何、素、襦、の、ぬ、く、う、あ、振、と、縫、ひ、連、杯、の、物、し  
た、に、具、若、布、麻、布、を、て、し、縫、ひ、深、く、紋、を、付、る、士、の、着、る  
ハ、胸、ハ、半、紋、何、の、雲、半、の、着、る、ハ、胸、紋、を、今、も、系  
類、の、段、の、う、の、き、さ、る、は、な、り、て、ハ、将、軍、家、の、巾、着、半  
着、る、ハ、又、近、世、醫、師、も、忘、れ、ぬ、を、妙、妙、と、い、ふ、縫、て、是  
く、之、紋、を、う、ゆ、へ、別、の、物、れ、移、り、さ、る、し、又、云、公、家、の、腹  
ハ、道、腰、と、い、ふ、物、何、の、胴、腰、と、は、あ、く、一、つ、物、と、あ、る、と、い、ふ、  
ら、ん

一 産婦妊婦禁艱 アヒヒラ 産婦妊婦共ニ飽ヲ食ヘバ小便滯テ

水腫トナル幾人モ夕オキミシ見タル人之談リ也 本州ナハ

見ガレ故ニ醫師ハ  
此事ヲ知テズ

一 カイドリ。打掛 立原氏 水戸儒士  
甚五良 同云武家ノ婦人小  
袖着テ帯シテ其ニ小袖ヲ打掛テ是ヲカイトリト云  
テ礼服トス古実有ル事歟又カイトリノ文字如何  
ノ負丈曰内裏官女ノ礼服ハ單衣表着唐衣裳ヲ着シ紅  
ノ袴ヲ着ル是男ノ束帯ノ如シ各儀ノ時ハ唐衣裳ヲ  
着セズシテ小掛コウケヲ表着ノ上ニ打カケテ着ル也是男  
ノ衣冠又直衣ナラシヲ着ルガ ウキキニニ區アリ。ウキキ。カ  
ホウウキキ。コウキキ是ナリ。コ  
ウキキガノ服也小掛ハ小袖ノ如ニテ廣袖也ウラモアリ地  
ハ綾ニテ色ハ時節ニヨリサマクアリ地下ノ者武

家ノ女ハ彼ノ小<sup>コウキキ</sup>袖ノ代リニ小袖ヲ打カケテ着テ打  
カケ共カイトリ共云フ打カケタル小袖ノツマノ開  
クヲ取オサメテ手ニカイトル意也文字搔取ト事也  
音相通エヘカイトリト云イカイハ助語ニテ何ノ意ナ  
シ京都ノ人ノ詞ニ行クヲカイエクト云モナデルヲ  
カイナデルト云ニ同ジ。カイドリト云詞モ久シキ詞  
也<sup>百七丁</sup>也<sup>五</sup>は<sup>七</sup>の<sup>丁</sup>に<sup>五</sup>砕<sup>七</sup>く<sup>丁</sup>ひ<sup>七</sup>も<sup>七</sup>て<sup>七</sup>あ<sup>七</sup>さ<sup>七</sup>ぬ<sup>七</sup>し<sup>七</sup>る<sup>七</sup>不  
そ<sup>七</sup>あ<sup>七</sup>の<sup>七</sup>河<sup>七</sup>け<sup>七</sup>た<sup>七</sup>ま<sup>七</sup>は<sup>七</sup>ど<sup>七</sup>ひ<sup>七</sup>て<sup>七</sup>な<sup>七</sup>れ<sup>七</sup>る<sup>七</sup>な<sup>七</sup>ま<sup>七</sup>し<sup>七</sup>  
ふ<sup>七</sup>ま<sup>七</sup>ら<sup>七</sup>と<sup>七</sup>や<sup>七</sup>く<sup>七</sup>ま<sup>七</sup>さ<sup>七</sup>う<sup>七</sup>せ<sup>七</sup>物<sup>七</sup>も<sup>七</sup>ま<sup>七</sup>ら<sup>七</sup>け<sup>七</sup>り<sup>七</sup>ぶ<sup>七</sup>ね<sup>七</sup>ら<sup>七</sup>  
む<sup>七</sup>し<sup>七</sup>ら<sup>七</sup>は<sup>七</sup>ひ<sup>七</sup>く<sup>七</sup>ふ<sup>七</sup>ら<sup>七</sup>。かい<sup>七</sup>ど<sup>七</sup>う<sup>七</sup>も<sup>七</sup>ぶ<sup>七</sup>い<sup>七</sup>の<sup>七</sup>う<sup>七</sup>は<sup>七</sup>も<sup>七</sup>。毛  
お<sup>七</sup>ひ<sup>七</sup>く<sup>七</sup>ふ<sup>七</sup>そ<sup>七</sup>ん<sup>七</sup>ぶ<sup>七</sup>い<sup>七</sup>の<sup>七</sup>ふ<sup>七</sup>と<sup>七</sup>お<sup>七</sup>く<sup>七</sup>は<sup>七</sup>も<sup>七</sup>く<sup>七</sup>し<sup>七</sup>

一初穂散錢賽錢 北卿氏曰神ニ錢ヲ奉テ散錢共賽  
錢共書キ又初穂トモ初尾トモ書ク何レヲヨシトス  
ヘキヤ○負文答云初穂ト云テ正トスベシ初穂ト云  
ハ其年田畝ニ生タル五穀ノ穂ヲ取テ先ツ神ニ供ヘ  
奉ルヨリ起リタル詞ニテ五穀ニ非ル物ニテモ新ニ  
出来タル物ヲ先ツ神ニ供ヘ奉ルヲ穂ニ准シテ初穂  
ト云サレバ早穂トモ書也三代実録卷第十八清和天  
皇ノ御宇貞觀十二年ニ饒益神室ノ錢ヲ改テ貞觀永  
室ト云新錢ヲ鑄ケセラシニ鑄錢司ト山城国葛野  
郡ノ鑄錢所ト兩所ヨリ錢ヲ奉リケレバ十一月十七  
日乙丑ニ敕使ヲ諸社ニ遺ハサレテカノ新錢ヲ奉テ

レシ其告文ニ所補作之早穂二十文<sup>乎</sup>左馬助從五位  
下多治真人藤吉<sup>乎</sup>差使<sup>行</sup>令捧持<sup>テ</sup>奉出<sup>賜</sup>ト見ヘク  
リ是錢ヲ早穂ト云フ<sup>ノ</sup>古ヘヨリ有ルヲ知ルベシ  
又散錢ト云ハ賤人ガ神前ニテ錢ヲ二三文ナゲ散シ  
テ奉ルユヘ散錢ト云也是ハ一向俚俗ノ詞也又賽錢  
ノ賽ノ字ハ玉篇ニ先再切<sup>報</sup>也トアリ返報ノ<sup>一</sup>ニサ  
レバガヘリマウシト訓テカ子テ神ニ祈リタル願ヒ  
ノ叶ヒタル時悦テ神ニ御礼申スヲカヘリマウシト  
云フ俗ニ立願ホドキト云ニ同シ其時神ニ奉ル錢ヲ  
ハ賽錢トモ書ベシ是亦俗<sup>一</sup>也初穂早穂ノ字ヲ用ル  
ハ正ニキ也早穂ノ字ハ古ルニ可用又初尾ト書ハ誤

也尾ハをノ假名也<sup>俗用ニ</sup>不穂ハほの假名ニ<sup>う</sup>る<sup>此</sup>の  
ひ遠ウ也

一 ミコノ、ニキト云訓 俗ノ愚昧ナル人猥リニ佛ヲ  
信シ神ヲモテアソヒ 加持祈禱占トク<sup>ク</sup>チヨセマケナ  
ヒ等ヲ好ム人ヲミコノ、ニキ人ト云フハミコハ巫<sup>ヒ</sup>  
也神ニ仕ヘ奉ル者也是ヲミコト云山伏市子<sup>ト</sup>ドモ  
巫ノ類也此ミコノ如クナル事ヲ好ムユヘミコノ、  
ニキト云ナリ

一 ナギレルト云訓 物ノ切レ離ル、ヲ。ナギレルト云  
ハタチキレルノ上畧語也タチハ断ノ字ニテ中タユ  
ル<sup>一</sup>也



一世継物語 栄花物語 世継物語ハ字多天皇ヨリ堀  
河院御代マデノ事實ヲ記セル物語ニテ全篇四十一  
卷共録此卷教也 本朝書籍目録ニ藤為業作トアリ業  
ハ土御門院御代ノ人伊賀守也歌 此世継物語ノ所  
ヲ抜書シ系図一卷添テ九卷トシ所々繪ヲ加ヘテ栄  
花物語ト題ヲ書タル本アリ是ヨリ混雜ニテ世継物  
語ノ題号ヲモ改テ栄花物語ト書タル本アリ又赤深  
衛門が作ト云フハ俗説也赤深死後教代ノ事蹟見ヘ  
タリ本朝書籍目録ノ印板ノ本ニ世継 堀河院御宇載  
君臣事藤 四十卷ト有ルニ並ヘテ栄花物語 赤深右四  
十帖トアリ是古本ニハ十二印板ノ本ニハ後人加筆

ニクル也且大鏡ニ世継ノ巻ノ名目録アリ今栄花物  
語ト云本ノ巻ノ名ニ同シ然レバ世継ト云フハ本名  
ニテ栄花ト云ハ彼ノ九巻ノ抜キノ新名ナルガ混雜  
シテ本書ノ名ト成レル也又云古書ニ引用タルニハ  
皆世継ニ云クトアリ栄花ニ云クトハナキ也是亦證  
トスベシ拾芥抄ニ萬葉世卷云ニ世継物語ニ云萬葉  
集高野御時諸兄大臣奉之云トアリ此事今ノ栄花  
物語ニ見ハタリ 此外古書ニ世継ト云テ引ケル物ア  
リツレク 草ニ世継ノ前ノ物語ト云ヘルハ鏡世継  
リ物語一名今鏡ニアル事也兼好ハ鏡ノ字ヲワスレ  
テ云タルト見ユ

一系圖 續日本紀卷八元正天皇養老四年五月癸酉先

是品舍人親王奉勅修日本紀至是功成奏上紀三十卷系圖一卷ト見タリ此既ニ系圖アリ其始ハ久之カ  
ルベシ

一大黒天 谷響集瑞應老僧正 泊翁和尚著 第四云容問食厨安大黒

天神者有所執無 谷出于義淨南海寄歸傳云西方諸  
大寺如咸於食厨柱側或在太庫門前彫木表形或二尺  
三尺為神王狀坐把金囊卻踞小狀一脚垂地每將油狀  
黒色為形號曰莫訶歌羅即大黒神也古代相兼云是大  
天之部属性愛一室護持五衆使無損耗求者稱情但至  
食時厨家每薦香火所有飲食隨列於前云云。○貞丈云  
右ノ文ヲ見レハ今此方ノ世俗ニ安置スル所ノ大黒

天ノ像ハ大ニ違ヒタリ右ニ見タル像顔色笑フ形ヲ  
云ハズ大ナル頭巾ノ事モナシ金囊ヲ把ルトハアレ  
氏囊ヲ肩フトハ云ハズ槌ヲ持ツ事モ見エス按スル  
ニ右ノ文ノ大黒天神ハ天竺ノ神ナル故佛菩薩明王  
諸天部ノ如ク頭髮ハ結ミ卷テ螺髮ニテ裸躰ニテ布  
ヲ以テ腰ニ絡其余リヲ肩上ニ掛テ腋ニテ狹ミ束ミ  
タル躰ナルベシ今世俗ニ用ル像ハ此方ノ大己貴命  
ノ故事ニ私意ヲ加ヘテ作りタル者ナルベシ大己貴  
ノ三字音ニテ讀メバダイコクイ也城音キ又一名大  
己貴命ト云モ大己貴ノ二字音ニテ讀メバダイコクイ也  
是ヲ大黒ニ附會ニテ混雜セリ古事記ニ大己貴命袋

ヲ負ヒタマヒシ事アリ又前大己貴命ニ仕ヘタテマ  
ツリシ事アリ古事記ニ大己貴命常ニ笑ヲ好ミタマ  
ヒシ事槌ヲ持テ依テ蹈ミ給シ事ハ見ヘサルヲ福ノ  
神ト称スルヨリシテ私意ヲ加ヘテ笑モ槌モ依モ付  
添タル也大ナル頭中ヲ冠リ給フ事モ古事記ニハ十  
シ皆妄作也又云世俗ニ用ル像面躰ヲ黒クスルハ天  
竺ノ大黒ニ似ルナリ大己貴命ノ色黒カリシ事ハ神  
書ニ見ヘズ又云梵語ニ莫訶摩訶ト云テ漢土ノ訶ニ  
翻譯スレハ大也歌羅伽羅ト云テ翻譯スレハ黒也  
サレバ莫訶歌羅ヲ大黒ト云也  
一 菊ノキセワタ 後撰集云隣ヨシヨシ行ル時九月八日伊

勢が家の菊よ錦をきせよつら〜 た〜うれハ又の向  
〜〜〜〜〜 伊勢 かしら〜び忍うきん  
ひさのむひけ〜るる落しや〜るん 一  
羞恥心 羞〜もあ〜る 宿の菊も〜花の〜  
やあせり〜ん 是ハ伊勢家集も〜〜〜それと  
撰集も入ら〜る〜 〇新勅撰集云九月九日  
従一位倫子菊の錦をたむひ〜 老のごひすてもや  
ゆるれ〜 業武部 菊のあ〜るは〜〜神あれ〜  
花の〜〜〜ち〜ゆ〜 是も業武部日記  
〜〜〜〜〜の事〜の枕草子よ九月九日の  
阿つ〜〜〜あ〜〜〜〜

るらあひひる綿やどいしくぬきけはの音し  
とてまやされしはとあてのやみしと程もそ  
てやいもすまはうあらぬつく見えさしおし  
新撰六帖 信有 恒存るる菊のませ終けさ見え  
まじきまは花屋より 貞丈云まじきまは今又残菊の  
白とひあはれし時をくまれうハ今もませけしもの  
まじや白のまのころも 以上誠言吾山法橋考貞丈云  
まじやけしハ真綿と兼花の大小まじやうひ丸くく  
く平くしてまもても赤くてもそ花乃色くよ深て花  
のまじまは九月九日は菊をまじやもく何をもんこまじ  
八日の初花おに花乃色のうはらるんものとまじて綿

とまじやまをませぐりし今も懸申うハ此事あり

一輪鋒 輪鋒ハ本名羯摩金剛ト云テ佛具也十字金剛  
ト云三股杵ヲ豎横ニ十文字ニ打チカハタル形也真  
言家ニ獨股杵三股杵五股杵ト云佛具アリ 股ハ鉗ノ  
ナ獨鉗ハ頭尾ニ釵鋒ノ如クナル物一ツアリ三鉗ハ  
三ニ五鉗ハ五ツアリ 谷響集云羯摩金剛者横豎三股杵是  
故ニ号云十字金剛謂執一殷金剛横撃豎突スル之標  
相也此乃金剛之作業故表本具作業智也 大日經云  
云以本性清淨故羯摩金剛所護持故淨除一切塵垢我  
乃至持杭過患疏十六云金剛有二種一者智金剛二者  
兼金剛也此梵云金剛羯摩謂所作事業也以此金剛業

而加持故得淨除其心地也云々。○貞丈按佛法像教トテ佛像ノ初ノ諸ノ佛具ニ至ルマテ物ノ形ヲ表シ像リテ教トスル也サレハ心智作業共佛ノ法戒ヲ金鉄ノ如ク堅剛ニ守リ持テ邪念惡業ヲ横ニ撃テ拂ヒ堅ニ突テ退タル義ヲ形ニ表シ像トリテ三股杵ヲ暨横十文字ニシテ其義ヲ教ヘ示スヲ羯摩金剛共云其形釵ノ鋒ノ如クナル物八方へ出テ輪ノ如クナルニ依テ俗ニ輪鋒ト名付タル也羽黒山伏ノ不動袈裟ニ付ル金物モ即羯摩金剛也俗ニ輪鋒ヲ神ノ紋トスル事ハ本地垂跡ト云事ヲ説ク兩部習合ノ神道家ニテ此紋ヲ貴ビ用ル也

一 招魂 タマヨハヒト訓ム死人ノタマシヒヨビカヘス也禮記ノ檀弓ノ篇曰復盡愛之道有禱祠之心焉北面求諸幽之儀也喪大記云升自東榮中屋履危北面三踊捲衣投于前司服受之降自西北榮凡復男子稱名婦人稱字鄭玄註云復招魂復魄也トアリ復字カヘスト訓ム魂ヲヨビカヘスナリ榮字ノキト訓ム屋軒也危字ム子ト訓ム屋ノム子也右ハ儒道ノ招魂之法也佛道ニハ教王經第十名金剛安立第十四名去識還來ト並説印真言今畧不出之谷響集ニ見ヘタリ

一 庚申本尊青面金剛 庚申ヲ守リ三尸ヲ避ルハ道家ノ法也青面金剛ハ佛家ニ在リ道家ニハ十二佛家ニ

庚申ヲ守ル下ハナシ陀羅尼集經卷第十云大青面金剛呪曰呪畧谷響集ニ見ヘタリ

一 イトバト云詞 イトハ最字ヨムトモ俗ニイキト云

ニ 同シノ音ナリ相通 イトヨシト云ヲ俗ニイキヨシト

云イトワロシト云ヲ俗ニイキワロシト云 イト同シ

一 スハト云詞ヨムト俗ニサアト云ニ同シ職人歌合ノ

立君ノ絵ノ詞ニスハ御覽セヨトアルハサア御覽セ

ヨ也スハト云ハバト云ハサアト云ハバ也

一 類聚国史 菅原道真公撰也或説ニ奉勅撰也ト云

所見ナシ未詳本朝書籍目錄拾芥抄等ニモ奉勅撰ト

ハアレト信シ難シ或説ニ菅公ノ撰ニ非ス其證ハ菅

公モ三代実録撰者ノ中ノ一人ナリシガ切ヲ終ラズ

半ニシテ左遷セラレ給ヒシ也然ルニ類聚国史ニ三

代実録ノ序文アリト云○貞丈按彼ノ序文ハ後人ノ

書加シタルヘシ其外後人ノ加筆ト見ユル事多シ冠

服ノ部ニ衣服令ヲ書加タリ令ハ国史ニ非ズ又漁獵

部ニ履仲天皇六年三月獵ニ出タル人狐ノ婦人ニ化

タルヲ見テ心惑ヒシニ傍ノ人中臣ノ後ヲ讀テ忽チ

ニ醒タリト云事ヲ載タリ中臣後討ハ罪ヲ解除スル

為メノ文也妖怪ヲ退ル文ニハ非ズ菅公何ゾ如此ノ

事ヲ載タマハシ正シカラス是亦後人ノ加筆也又云

国史ニ見サル事ヲ載タル莫アリ桓武ノ御宇崑崙人

本綿実ヲ持来ル事ノ類也是ハ後人ノ加筆ニハ有ベ  
カラズ史外ノ実録ニ載スルヲ取テ管公ノ加ヘ給ニ  
ナルベシ能虚実ヲ考ヘ正スベシ全部二百卷アリ多  
ク亡失テ今廿六卷ハカリ残リテ有リ 凡書ノ真偽  
虚実ハ博ク  
古書ヲ見ケル眼ヲアラ  
ガレバ見分ケテレズ

一 マタキト云 詞 夕ノ字ノ清濁ニテ違アリ清ヲ云ハ  
全キタ也濁シハ未也新撰六帖ニ信実朝臣 かき  
ひる葉のませわのけさるれもまきさかののさ  
まろり 海まきさか 金盛 夕ノ字スミテヨム  
ナリ又伊勢物語 夜もあけを 狐よ のりく  
くけのまきまにやまてせるとやうけ まきま

まきの字よりうらむいまむとら子河く

の男伊

一 青色五品 一ニハ藍深ノ色是青ノ正色也二ニハ草  
木ノ葉色ヲモ青ト云 実ハ綠色ニ黄ハ交リタル色也  
黄ハ木ノ勝チタル 三ニハ灰色色白ニ少黒ク交リタル  
正色トモ子ツミ色トモ云此色ウス青ニ似テニギラ  
ハニキヤウニ見ユルコト云フエトアリ  
ヲモ青ト云 蒼色ト書ク馬ノ毛ニアヲト云ハ蒼也実  
ハ灰色也四ニハ白キヲ青共云事アリ正月七日禁中  
ノ白馬ヲアヲ馬ト云白色ノ至極潔ナルハ少青ニア  
ルカ如ク見ユル故也白ヲ青ト云ハ白馬ノ節會ニ限  
ル也常ニ白ヲ青ト云ニアラズ五ニハ黒ヲ青ト云事

モアリ黒毛ノ馬ヲ上古ハ黒馬ト云タルヲ後代ニ至  
リ今世ハ青ト云是ハ右ニ記セル蒼色ノ其濃クテ黒  
色ニ見ユル意ニテ青ト云ナルベシ奥而仙臺ヨリ今  
ニ牧馬ヲ出スニ仙臺人ノ云ハ黒馬ノ耳ノ中ノ毛黒  
キハ黒毛ノ馬ト云黒馬ノ耳ノ中ノ毛蒼キハ青毛ノ  
馬ト云ト云ヘリ

一 無上無下ト云 詞 是ヨリ上ハナシト云下ヲ無上ト  
云是ヨリ下ハナシト云事ヲ無下ト云ムゲニ学文十  
シムゲニ酒吞ズナド、云ハ無下ノ字也又ムゲニ聞  
入レズムゲニツレナシナド、云フムゲハ無解ノ字  
也解ハ解釋ニテ道理ヲカミワケテサトル也無解ハ

道理ヲカミワケズサトラザルヲ云

一 吐字 諸説文ニ相謂也トアリ我ト彼レト相謂ル也 雅  
詔ニハカタルト云今ノ俗語ニハハナスト云フヲ吐  
ノ字ヲハナスト云フニ用ユ即チカタル也

一 書ノ題 新撰新編号 新ハ舊ニ對スルノ名也フルキ  
書ニ何ニト云書アリシヲ増補改正ナドニテ新シク  
書キ直シタルヲ新撰新編ト号スルモアリ舊書ニ漏  
レタル事ヲ別ニ集メ記ニテ新撰新編ト号スルモア  
リ又昔ヨリ無キ事ヲ今始テ新ニ書キ察シタルヲ新  
撰新編ト号スルモアリ  
一 道ガエカスト云 詞 古書ニ道カエカスト道ユキ難



シナド、云詞アリ。露寺職人歌合ノ絵臺目クリノ  
詞ニ一尺ニアマル御臺目ハクリニク、テ道ガエカ  
又トアリ道ガエカ又トハ今ノ俗語ニテキガアカス  
ト云ニ同シ按ズルニ「テ道」ニアラズ冠ナリ其事  
ノ亮ザルヲ亮ガエカ又ト云也其事ノ成果ルヲ亮ト  
云亮満スルノ義也

一 筆刀 タタウハ。タカウナガタナノ畧語也。以タカナ  
テヤ。テケノ 髮ノモト、リノ先ヲ切ス小刀也。切ル忌  
ストハヤ 其形サキ細ク本太クシテ筆ノ形ニ似タル故  
筆刀ト云京羽二重織留ニ京都ノ書ナリ云二條ノ北  
西ノ洞院ノ鍛冶金道ガ小刀毎年禁裏院中ニ獻之親

王元服ニ用ル所ノ筆刀又旧例ニ依テ金道是ヲ調進  
ス親王御童形ノ時髮長クウシロニ垂ル元服ノ日筆  
刀ヲ以テ其末ヲ切リ髮包畏之云云

一 大追物馬場旧跡 右同書云下賀茂川合ノ社ノ東北  
ニ在リ傳云云文安四年四月將軍義政之ノ時此所ニ  
テ大追物アリ其後後花園院寛正六年八月兵行又後  
陽成院永録三年三月三日兵行東西四十二間南北四  
十間也

一 由加物 延喜式卷七神祇式曰踐祚大元應供神御由  
加物器料注神語異雜器由加物雜贄同為由加物。○  
貞文按右本文由加物ノ下ニハキ比良加。坪幣薄絶。倭文。

木綿麻葉薦作具鑿芥錦等アリ是ノ物名ハ由加物也  
○又按神語トハ神祭ノ言語ト云事也神祇道ノ官人  
ノ云習ハシタル詞ナリ神語カニバト云バ又カニ  
一アエカト云詞 古キ物語ノ冊子ニ安カト云詞  
リ平安ノ二字ヲアエカト訓也和名抄ニ淡路国津名  
郡平安和名阿トアリ平安ハ郷名也詞ニアエカト云  
モ同文字也原氏物抄ハあるは云詞あり  
一アツジレト云詞 病人ノ病重ク死期ニ近キヲアツ  
シレタリト云日本紀坤代靈運當遷ノ四字ヲアツジ  
レタマフト訓来レリ按ニアツハ厚也病勢ノ厚クナ  
リタル也シレハ助語也

一麟角 日本紀天武天皇九年春二月辛未有久云得麟  
角於葛城山角本二枝而未合有穴之上有毛毛長一寸  
則異以獻之蓋麟角也  
一古史 日本紀天武天皇十年三月庚午朔丙戌天皇御  
于大極殿以詔川嶋皇子忍壁皇子廣瀨王竹田王桑田  
王三野王大錦下上毛野君三千小錦中忌部連首小錦  
下阿曇連稻敷難波連大形大山上中臣連大島大山下  
平群臣子齋合記定常紀及上古諸事大鳥子首親執筆  
以録焉  
一禁式 右同書同年四月己亥朔辛丑立禁式九十二條  
因以詔之曰親王以下至庶民諸所服用金銀珠玉錦



のりれよの宣命のいみくもさるはひのまのま  
ととハ本納之入内のおとぐとは内ち居し右れおと  
とハ右ち居しおちあんとハ越任也

一ノ宮 淡路常磐草 淡路三原郡仲野安雄作八冊  
享保十五年成淡路国ノ記也

卷四 伊佐奈岐 神社ノ下 曰按スルニ一宮と云ハ美流多ノ宗神

天皇の居のハ天社地社を一宮とりハ垂仁天皇の重

ゆノ國社を二宮と云と又ハ天社を一宮と一地社と

二宮とすと又ハ一國守護神の儀も云上代ハ一

宮の名り一ノ貞丈之國史令式古書ハ一宮の名又急

に相茹るごよハ一宮二宮三宮まで何ノ國ハ依て二

ノ宮何れし何ノ三宮何れし何ノ不定何の時代何の

あめて定めし事歟 詳るらん

一前王廟陵記誤 廟陵記曰淡路陵式曰在神宅之東二

十町許 津名郡下川井村高島 常磐草云廢帝陵ト称スル

所三原郡ニモアリ同按よハ延喜詔陵式ハ三原郡

ノありと記せし物とハ川井村よ何れと廢帝の陵ト

すハ俗傳の誤り也 帝王編年記曰廢帝即年三

十二奉葬淡路国三原郡ニ延喜諸陵式曰淡路陵廢帝

在三原郡北城東西六町南北六町守戸一煙遠陵也

一ノサゾト云 詞 事ノ様子ヲ推量スルニサゾト云 詞

リサコソト云モ同シ然シカ也シカラ約ムレハ音サト

ナル音サセ切切ヅハ助語ナリ俗語ニサリデアラフト  
云ニ同ジサゾト云字俗ニハ喚ノ字ヲ用ユ然レトモ  
字書ニ喚ノ字固車切喚然ハ陽應也イッカリマツルトアリテサソト  
云義ナシ其字義適ハズ左レ共俗用ニハ其マニテ  
用ベシ雅シク書クベキニハ蓋然ノ二字ヲサゾニ用  
ベシ大カタサウデアラフト云意ニナル也然字ニカ  
一大カタト云切 事ヲ様子ヲ推量スル 切ニオホカタ  
ト云ハ蓋ト云フ字ヲ用ベシ 俗文ニハ大方ノ字ヲ用  
ル也雅シキ文ニハ推量ノ詞ノオホカタト大方トハ  
同シカラズ大方ハ大底大概トドノ意也  
一デト云詞 ニテト云詞ヲ俗語ニハデト云タトヘハ

是ニテト云フヲ是レデト云類ニテヲ約ムレバ子  
トナル也 音子ナリ 子ノ音ヲデト云ハ言便也言便ト  
コトヤリ ニ云一也 ナニヌ子ノヲ濁リテ云ヘバダゲツデド  
ナル是ヲ羊濁ト云也 ナニヌ子ノハ清音ナレ濁リ  
テ云ヘバダゲツデド、濁ラレ、故羊濁ト云也ムバ  
モトニゴレババビゴボトサレバニテヲ約メテ子  
トナルヲ子ヲ濁テデト云也○凡雅語アリ俗話アリ  
語ヲ釋スル本語畧語約語轉語あり五音の相通清  
音濁音半濁言便連聲等を知テ釋ス  
一宣命文詞 宣命の文ハ天皇ノ御意ヲ記ニテ或ハ神  
祇ニ告ケ奉ル文モアリ或ハ諸臣及万民ニ告給フ文

モ有リ其文詞人躰ハ上古ノ宣命ハ皆吾朝ノ詞ヲ用  
テ祝詞被詞ノ如クニテ少クモ唐詞ヲ用ル<sup>ル</sup>トナキ故字  
音ニヨム所ナシ中古以來ノ宣命モ祝詞被詞ニ似タ  
ル共其中ニ唐詞ヲ用ヒタル所アル故字音ヲ以テヨ  
ク所アリ是ハ宣命ノ古風ヲ忘レテ唯文章ニノミ拘  
ハル故ナルベシ本意ヲ失ヘル也神祇ニ告奉ル宣命  
ハ持ニ唐詞ヲ用ヒテニキニヤ

一 蘓 大臣ノ大饗ノ時蘓甘栗使<sup>シ</sup>ヲ立ラレ、<sup>一</sup>江家次  
弟大饗雜<sup>下</sup>等ニ見エタリ蘇ハ借音<sup>テ</sup>書タル也實ハ  
酥字ニテ酥<sup>略</sup>也延喜式卷三十二民部式下口諸国貢  
蘓<sup>香次</sup> 凡諸国貢蘓各依番次當年十一月以前進<sup>ル</sup>

輪轉隨次終而復始其取得乳者肥牛日大八瘦牛減半  
作蘓之法乳大一斗煎得蘓大一升但飢<sup>秣</sup>者頭日別四  
把〇貞丈云牛乳ヲ煉タルヲ酥酪ト云更ニ酥酪ヲ精  
煉シタルヲ醍醐ト云粘<sup>テ</sup>如脂白色如雪其味耳美也  
今世俗ニ蠻語ヲ傳ヘテボウト口ト云是也

一 耳栗 蘓甘栗使耳栗事ヲ村井敬義ヲ以テ御厨子所  
ノ預リ高橋若狹守紀宗直ニ尋ケレバ丹波国ノ栗ヲ  
云ト答タリキ

一 オト云<sup>ト</sup>訶<sup>並</sup>嗚呼尾籠ノ字 オト云ハオロカト  
云ヲ中畧シテオカト云カト<sup>ハ</sup>相通ノ音ナリ故オカ  
轉シテオト云也オカノ正字ハ愚ノ字ナリ愚ノ字

二テハ。オウトヨメ。又故訶ノマ、ニ嗚呼ノ字ノ音ヲ  
 借り用也。又ハ尾篋ノ字ノ訓ヲ借りテ用ル也。オロカ  
 ヲ中畧ニタル轉訛也。今俗ニ。バカト云ニ同シ。俗ニ尾  
 篋ノ字ヲラコトヨマツテ。ビラウトヨミテ。無礼ノ  
 一トスルハアマリ也。古書ニヲエノ者トアルハ。バ  
 カナ者ト云フ。オロカガマシト云ハ。バカラニイト云  
 一。此。又云尾字古書ニハ。ヲノ假名ナリ。俗ニハ。オノ  
 一。オノ。オノ。オノ。如此ニ様ニ書ケドモ。オノ。オノ。正  
 トスヘシ。オノ。オノ。オロカノ中畧ナレバ也。オロカハ。オ  
 一。オノ。假名ナリ。ヲをニ非ズ。

一望陀布 房総志料 上総安房兩國ノヲ記ス云延喜  
 式貢物ノ中ニ望陀郡 上総ヨリ 望陀布ヲ出セリ紫藤ノ  
 皮ヲ摧織テ 飾 浴トス今樵夫ノ服トナル物是也續日

本紀聖武帝紀ニ上総望陀細賢ノ有ルモ同ク是也  
 一三隣亡日 田舎ニ三隣亡トテ忌ム日アリ右同書云  
 上総ノ俗ニ毎月亥寅午ノ日ノ配當アリテ其日ニ當  
 リタル日ヲ三隣亡ト云譬ハ正月朔亥ノ日ナレハ十  
 三日廿五日ヲ云二月ハ寅三月ハ午是亦同シ四月ハ  
 亥ニ復ス此日修屋採薪ノ功事ヲ断ツシカラサレバ  
 祝融ナリノ神氏崇リヲナスト此俗本州ノミト思ヒニ  
 武州金沢ノ俗モ亦シカリ或上毛 カウツチ 十トニテハ此日ニ  
 當リヌレハ正月門戸ノ飾モセズト 此ハ其家ト西隣  
 向ノ隣マテハシト。○負丈云此日ヲ忌ム事昔ノ陰陽  
 家ノ説ナルガ京ナドニハ其説絶テ田舎ニハ傳レル

ナルベシ 田舎ニハ古キ事間々残り傳ハレル有リ

一 一錢切 右同書云望陀郡真里谷村ニ天寧山真如寺

ト云上総曹洞沘惣録ノ寺アリ寺領三十石門前ニ禁

勝アリ條目ノ文ニ門前百姓於非法有之者可為一錢

切事ト按ニ一錢切詳ナラズ清政記ヲ考ニ大岡清政

ニ賜リニ高廉陣中ノ制札ニ軍勢於味方地乱妨狼藉

輩可為一錢切トアリ戰國ノ比普キ詞ト見ユ猶亦可

考○貞丈按一錢切ト云フハ犯人ニ過料錢ヲ出サシ

ムルナラニ切ノ字ハ限り成ルベシ其過料ヲ攻取

ルニ役人ヲ差シ遣シ其犯人ノ貯ヘ持タル錢ヲ有ル

限り取り上ル譬バ僅ニ一錢持タルトモ其一錢限り

不殘取上ルヲ一錢切ト云フナルベシ搜シ取ル事ト

聞ユ

一 廿五里村 同国市原郡松ヶ島ト云所アリ十町許

アリテ二十五里村ト云アリ二十五里古来ツエビニト

唱ヘ来レリ實ハ露乾地ト書ト相傳フ昔此處ニ大刹

アリ今東泉寺ト云真言派ノ寺是也ト此比堂内ニ置

所ノ佛教靈異ヲ顯ス鎌倉公甚崇信ニ給ヒ毎月燒香

使ヲ彼ニ遣ス鎌倉ヨリ此地ニテ海陸相距ルニ關東

道廿五里古以六町故二十五里ト書モツエヒ十

唱ヘシト彼土ノ邑主佐久間氏談ハ右同書ニ見○

貞丈云後代田舎ノ地名ノ文字ヨリ難キ事右ノ類



リ人土俗不学ナル故文字ヲ用違テ書来テ改メガ  
モアリ是亦ヨミ難シ右同国<sup>総上</sup>ニ古府里村ト云アリ。  
ソレヲバゴシヤテ村ト唱来レリ。古射<sup>ゴシヤ</sup>里ノ文字ノ誤  
ナルベシ又京ノ万里小路ノ里ノ字モ呈ノ字ノ誤ノ  
改メガルナルベシ此類多カルベシ

一 神籬磐境

神籬ノ字ヒモロギトヨム磐境ノ字イ  
ハサカトヨムナリニ共ニ神社ヲ指テ云名也神社ノ  
外廻リニ短キ木ヲマバラニ並ベテ横ニ又キヲアテ  
、結ヒタル垣ヲ。ヒモロギト云ハ日影ノ漏ル垣ト云  
フヲ略シテ。ヒモロギト云音相通ト也磐境トハ磐ハ  
訓ヲ借リテ用ル也実ハ祝境<sup>イハサカ</sup>ト云フ也イワヒサカ

ヒヲ略シテ。イハサカト云也神ヲ祝ヒ祭ル境ト云事  
也。ヒモロキトモ。イハサカトモ云ハ神社ノ事ニ成  
ル也今世モ神社ニ井ガキト云テ間々マハラニ透夕  
ル垣アリ是モヒモロギ也神籬磐境ノ事神道者様ニ  
ノ曲説ヲ云用ル事勿レ

一 赤腹魚

伊豆志<sup>伊豆国田方郡住人伊東氏社綱入曰</sup>  
道道煩傳書抜集タル藁也トアリ曰

箱根山湖水ヨリウダヒニ似タル赤腹ト云小魚ヲ取  
リ上ゲ炙リ物ニメ旅人ニ進ム其外鮓鱒ノ類ヒ有リ

○貞丈赤腹ヲ見シニ長五寸許薄黒ニ腹ハ赤シ

一 青砥左衛門祖父 右同書曰大場村或説云大場十郎  
近郷ト云者此所ヲ領ス兼久ノ御謀反ニ宇治ノ年ニ

向テ印アリ其賞ニ下総国青砥ノ庄ヲ給ハル是ヨリ  
青砥ニ移リ青砥ヲ以テ氏トス相摸守時頼ノ時青砥  
左衛門藤綱ト号スル人ノ祖父也ト云  
一 鮮口 右同書云 岩科普照寺什物觀音云々 御宝前鮮  
口アリ元應二年大中臣友綱卿ノ寄進也。口ニク子此  
一 比既ニアリ  
一 子生至五十日授名 平家物語卷十維盛出家ノ條ニ  
云重景涙ヲ押ヘテ申ケルハ重景カ父與三左衛門景  
康ハ平治逆乱ノ時ニ故殿ノ御供ニ候テ二條堀河ノ  
邊ニテ鎌田兵衛ト組テ悪源太ニ被討候又重景モ十  
シカハ有リ候ヘキナシ共其時ハ末ニ歳ニナリ候ヘ

バ少シモ覺候ハズ母ニモ七歳ニテ後レ候又情ヲカ  
クベキ親シキ者一人モ候ハガリシニ大臣殿重景ヲ  
御前へ召テアレハ我命ニ替リタル者ノ子ナレバト  
テ朝夕御前ニテソダテラレ參ラセテ生年九ト申セ  
シ時君ノ<sup>維</sup>御元服候シ夜忝モカシヲ取上ラレ參  
ラヒテ盛ノ字ハ家ノ家ナレハ御代ニ傳フ重ノ字ヲ  
バ松王ト被仰テ重景トハ召レ參ラセケルナレ其上  
童名ヲ松王ト申スニ父カイ抱キテ參リタリシカハ  
此一门ヲバ小松ト云ヘバ祝フテ付ル也ト仰ラレテ  
松王トハ召レ候キ<sup>忠寄</sup>考<sup>寄</sup>ノ五十日ト書テイカトヨム  
一 伊さうがん 増後卷八<sup>巻</sup>の巻<sup>の</sup> 正應<sup>正</sup>ノ後系とい

ひくさるるに後清織院のぬきりぐんを何のまゝ  
ひきせりしにみてもさすえしきぬきり  
ぐんが清たふし衣ノ本字壯也サ清分と云ふ同  
した恩。山たふしのたふか子弟子はニヤウ。さうと  
キし異言を用ユ板本ノ増鏡よぬきりぐんとその字  
用タルハ誤しりなほひ遠たふし

一骨壺 諸国ニテ農民土ヲ堀テ石棺ニ堀リ當ル事アリ  
棺ノ内ニ少キ壺アリ高廿大抵六寸ばかりノ陶器  
也葉ヲカケズスヤキニテ固シ色ウス黒シ両方ノ腹  
少シ平クシテ両方共ニウツマキヲ大ニ文ニ付ル赤  
土器ケノ尻ニアル文ノ筋ノ如シ壺ノ尻ハ丸シ平カ

ナラザル故立テ  
置ク物ニハ非ズ



形如此尻  
耳ナキモアリ

西ノ腹ハ平キハ横ニ伏セ置ベキ為ナリ此物處ニ  
テ堀得ニテ繪図ニシタルヲアマタ見ツ又其真物ヲ  
モ見ニ事モ有リキ是死人ヲ火葬シ其骨ヲ納メシ壺  
ナルベシ或ハ此壺ヲ得テ花瓶ニ用ル人モ有リ千年  
ノ古物也共其本ハ葬具ニテ凶器ナレバ座席ノ飾ト  
ニテ弄翫スベキ物ニハアラズ忌ムベシ吉凶ヲ分ル  
ハ禮也モノイマヒニハ非ズ礼ヲ正ス也

一内慶盤所 東鑑卷十文治六年十一月廿三日癸酉  
小雪大納言家御參仙洞終日令候御前給又長指百足

綿千両緝緝世端被進内慶盤所云ニトアリ此内慶盤  
所ト云名目禁秘抄禁掖抄拾苒抄江家次第名目抄等  
其外古書ニ見エス按ニ同キ臺盤所ノ寫誤ナルヘシ  
同ノ字ハ上ニ謂フ所ノ仙洞ヲ指ス也同ノ字内ノ字  
紛ルベシ草書ノ芝ノ字卷ノ字紛ルベシ 大納言家ハ  
任タル時ナリ  
一ナゼト云詞 俗語ニナゼト云ハナニ也ナニ轉ジテ  
ナジトナル 音ニト ナジ又轉ジテナゼトナルセト  
音相 古キ物語ノ冊子ニナジカハ以テタマルベキト  
云語アリナジカハト云ハナニカハト云フ也  
一ニクシルト云詞 俗語也ナシクシケルノ畧語也

一エジレルト云詞 俗語也クジケルノ轉語也ト音相  
通ニトケ  
ト音相通  
一人麻呂官位 人麻呂ノ官詳カナラス藤原敦光カ人  
麻呂ノ讚ニ仕持統文武之聖朝遇新田高市之皇子トア  
リ是萬葉集之歌ヲ以テ時代ヲ考タル者也日本紀ノ  
持統天皇紀及續日本紀ノ文武天皇紀ニ柿本人麻呂  
ノ名見ヘズ官位昇進ヲ載セズ是賤官下位ナル故因  
史ニ載サルナルベシ又位ノ事ハ古今集貫之カ序ニ  
カフキテハの々々ぬらきのやむ人あはれと何ノ紀  
淑望ガ真字序ニハ柿本太夫者トノミアリテ位ノ名  
ハナシ此大夫ト云ハ後代五位ヲ大夫ト称スルトハ

別ノ事ニテ上古ニハ男子ノ美称也猿丸大夫ト同類  
也飛鳥井榮雅卿ノ記ニ六位ヲ云ハのくぬとす  
や陸奥と云ケノクト云フモ五音通ズルバ也ト云  
ヘリノ貞丈按六位ナルベシト云ハ實ニ然ルベシ六  
位ナドノ賤位ナレバユソノ國史ニ人麻呂ヲ載ガルナ  
レ又六ツニツノ如キ五音相通スレバトテ数量ノ字  
ヲハ通音ヲ用テ書ク事ハ有ルヘカラズ蓋シ草書ノ  
六ノ字ワロク書ケバ三ノ字ニ紛ル也古本ニ六乃  
くぬとすと見誤テ三ノ位ト字ニ傳ヘタルナ  
ラム古今集古代教本有リニ定家卿ノ自寫ノ本モ嘉  
祿本貞應本トテ二本アリ轉展書寫ニ依テ誤字モ出

来ベシ定家卿本ヲ定ル時諸本ヲ取捨シテ了簡ヲ加  
ヘテ将来家ノ證本トセラレシ由細川玄旨ガ詠歌大  
概抄ニ見エタリ弥貫之ガ真本トハ違ヘシ俳諧歌ヲ  
誹諧歌ト書タルモ定家ノ所為歟

一 酒々まろの歌 為忠朝臣家百首 弦月題 親隆

トモスハハ新  
ニヨセタリ

同射場始 顯廣

まききいゝくさやんかきやさハのら場いゝと  
散木集下 志於上 ねりきる人のあふりや  
ねりきる人のあふりや

ヤルれをまゝまきのやうてのひろくろくにひまひつけて

ほろり

平ノアルケ 竹筒ニテヲニルヘシ まるゝぬやうての作とやうにせしめて世をいささ

夫木抄 天仁元年顯季の家歌合 琳賢法師

いふせんまのられもよれか引をらつてあゝぬ白成 スレモ

ハ鞘ニヨ セタリ ○ 木竹合セタルヲ考ヘシ

散木集 物名 まゝまきのやうて

こゝろまゝまきのやうてすむ氏さうとほひもさうとま

○貞丈云上古弓二種あり一は丸木弓二はま、

木弓是也丸木弓ハ櫛弓或ハヒニ櫛ノ字ヲ借用ス又ハ

用ニ梓弓スキサハキノ木櫛弓弓ノ木ト云ト也 櫛弓ヤケ

ギルニ似テコ 柘弓イヅニハ桑ノ木ノ種ル 是皆古記ニ其

名出タリ丸ク削リテ外ハアサリ弓ニ作ル是軍弓也ま

きりハ今ノ木ト竹ヲ合セタル弓也是ハ上古朝廷ニ

テ射礼賄射大射等ノ時、的ヲ射ル弓也次将装束抄

ニ見ヘタリ此弓ニ具スル矢ハ角又ハ木又ハ錫ニテ

矢ヅリ作ルコレヲまゝ矢ト云木又角ノ事ハ延喜

式ノ兵庫寮式ニアリ錫ノ事ハ堀川院次郎百首ノ歌

ニアリヲス借リ用ナリ字又真ニ木弓又真ニ岐弓又真ニ

弓トト、書クハ借リ字也實ハ継木弓也木ト竹ヲ継

グ也継ノ字マストヨムハ継父継母継子ト云ニテ知

ルベシ古代マ、キ弓ハ軍ニ用井ズ雨露湿気ニ逢ニ



ナドヲ作ル人ハ出家又ハ俗人ニテモ仏ヲ好ム人ニ  
テ常ニ見ル所ハ仏書ノミニテ国史ナドヲ見渡サズ  
浅見陋識ナル輩也故ニ吾朝上古年号ナカリニ事ヲ  
知ラスニテ何天皇ノ御宇ト云ニ年号ヲ記サズレバ  
叶ハズ事ト思テ年号ヲ書コトスルニ其年号知レザ  
ル故年号ヲ偽リ作テ書タル也詐偽ヲ用ル事ハ昔ヨ  
リ仏家ノ習俗也年号ノミニ限ラズ彼徒ノ書ニハ時  
代前後顛倒相違ノ事奇怪妖妄ノ事多シ夫ヲ難詰ス  
レバ是仏徳ノ神通力也人間ト一同ノ都ヲナスト勿  
レト云テ却テ夫ヲ貴ビ誇ルエハ捕へ所無キ者也俗  
諺ニ所謂飄ヒラヲ以テ簞タテ奠タテヲ押ヘルガ如シ

一ハツ島ミ使 顯昭法師ガ袖中抄ニ云代初イを島シ使  
ういとそ内ウチの西ニのめめのたたららててををししめめののづづととしし事事を  
ゆゆるるととれれ島島くくふふととししききをを後後のの流流りりととるるととしして  
西西のの海海ををむむひひててももああるるのの島島のの神神ををああららととしし 島島使

は家次  
才ニ見

一菓子物語之歌 右同書云物語ハ由縁をううととままハハ終終子  
りりとといいややももたたししああるる古古歌歌ををまま加加ああるるのの定定事事ととしし 貞丈云  
伊勢物語

語ナド此ク  
グニ成ベシ

一五十鈴川 伊勢国ニ在リ倭姫世紀類ノ偽書等ニ昔  
天ヨリ此川邊ニ五十鈴降りケル故五十鈴川ト号  
スルト云ヘリ此事日本紀古事記古語拾遺等ノ正ニ



キ古書ニ見エズ信ズルニ足ラズ文字ニ付テ妄作シ  
タル説也用ル事勿レ今按スルニ伊勢國ハ神武天皇  
ノ御宇伊勢津彦ト云フ人住居セシ國也天皇勅シテ  
天日別ノ命ヲ使シテ征伐セシメントシ給マヒケレ  
ハ畏レテ國ヲ避テ天皇ニ獻テ去レリ伊勢津彦ノ名  
ヲ取テ伊勢國ト名付給ヒケル由伊勢風土記ニ見ヘ  
タリイصب川ト云ハ伊勢津川ノ轉語也サニスセリ  
五音相通ユヘ轉ゼシ也其轉語ニ隨テ五十鈴メ訓ヲ  
借りテ文字ヲ付タル也五十ノ二字イイトヨムナリ五  
十ト書テイカトヨム  
吾國上古ノ事ハ詞ヲ本ニシテ文字ノ音訓ヲ借りテ  
イカヤウニモキ也サレバ文字ニ付テ説ヲ作シハ本

義ヲ害スル事有リ又云上古朝廷ノ神祭ニ神前ニテ  
鈴ヲ振り鳴ラス事ハ古書ニ曾テ見ザルニ後代鈴ヲ  
振ル事ハ五十ノ鈴ノ天降リシト云偽説ヨリ思ヒ寄  
リシナルベシ

一男郎花 女郎花ヲミナベシ也男郎花ヲトコベシ也  
袖中抄云万葉ニ家持ガヨメル アキノ野ニ今コノ  
コロノモノ、フノヲトコヲミナノ花ニホヒシニ  
ヲトコトハヲトコヘシヲ云。オホトキトテヲミナヘ  
シノヤウニテ花ノ白キ也云、

一合血 袖中抄云みらのくれえびまのみより血他  
みらるるやをぬる子 顯昭云奥のえびまハあまのの子



たつとよくわきやいふくむもちとて後くふわ名や  
そらうぐー又万葉上云 山あきのう月しう雲歌色  
のあうよのをもく 夢よ見えは、赤き色よ遠く水月系  
物以上袖中抄に見く多し。負丈云袖中抄ノ説決定  
ニタル事ナシ皆推量ノ浮説也今按万葉ニ唐棣花ト  
書ケル、棣棠花ト書ベキヲ誤テ唐棣花ト書タル也  
棣棠花ハヤマフキノ花也此花ハ子ズ色ナリ故ヤマ  
フキノ字ニハ子ズト訓ヲ付タル也正訓ニ非ス義訓  
也ハ子ズ色ハ黄色也ハ子スハハニジノ轉語也ニト  
子音相通也ジトズ音相通也ハニジト云ハ黄櫨也和  
名抄卷十四染色具ニ黄櫨文選注云櫨落胡及和今之  
谷波迹之

黄櫨木也ト見タリ此木ハ身木モ葉モ能ク漆ノ木ニ  
似テ幹レ易シ木白クニテ心ハ黄也其心ヲ取テ煎シ  
テ黄深ヲスル也黄櫨深ノ御袍モ此木ニテ染ル也其  
名波迹芝ナルヲ音ノ相通ニ依テ轉シテ波称受トモ  
云又波迹之ヲ中畧シテも志云云も志紅染物ももよ  
久くも志を田舎うてハもせむ云音相通也右ノもくも  
福也色ハ即チもホド色トて黄色也されん萬葉上唐  
棣花棣棠卷ノ文字用アヤニんのどと訓を付け又  
も福も色ももあうヤマフキノ花ハ黄ナル故也又も福也色の  
あうよのせもいとものも色の衣ハ赤裳をきつる也や  
云り此物と云くも福也色ハ赤き色ト云はるハ誤し

既よ山あきのやほしむらさきもどき色のこあらむの黄をうる  
 りぬうし又そのもをよはするうらうひやはまじき  
 物よあふらうらふ色の変る事と黄色なる漆相  
 為かるるぬるまけ色かゝるゆゑ其のせりつるやう  
 又夏まけくさりのを秘伝といやゆあまの黄をのま  
 暎くあし夏まけては夏かけてと云ふほどに月よ道  
 ままをうらうやゆあまをいひん色といふを秘伝色と  
 暎く花とをいひん色を思へる詞りるるゆあまの如名  
 を秘伝色といふは秘伝色の色を依て云ふ也  
論語卷五子  
罕篇唐棣之  
 一 梔朱註云唐棣郁李也ト字ハジト訓 日本紀ニ天梔弓ヲアマノハジ工ト

ト訓セリ梔字クナナシ也ハジトヨムハ正訓ニアラ  
 ズ義訓也ハジノ本字櫛也和名抄染色具ニ櫛和名波  
 迹之トアリ波迹之ヲ略シテ波之共云古歌ニんがも  
 みらトヨメル是也田舎ニ云ハ又和名抄染色具ニ梔子  
 和名久知奈之トアリ梔ニ櫛モ黄色ヲ染ル具ナルユ  
 へハナリニ梔ノ字ヲ借り用ルナルベシ舎人親王ノ  
 比ハジニ櫛ノ字ヲ用ル事ノマダ詳カナラサリニ故  
 黄染ノ義ヲ取テ梔ノ字ヲ借用セラレシニヤ梔木ハ  
 弓材ニ非ズ櫛ハ弓材也今モ弓ノ側木ニ用之古ハ丸  
 木弓也  
 一 吏部李部 吏部ハ式部省ノ唐名也 李部モ同じ拾

一抄  
見ユ

一三ツノカミハ 袖中抄第三云 弓がもこが尺もそ

河のまじまじと人そりのかいさきと 顯昭公輔

親集云 秋宮の九月あまうりて 狩つて 扱尺もそり月あま

そりあまうりて 女房とあまうりて 狩つて

いかりとあまうりて 狩つて 扱尺もそり

中細之後志々のあまうりて 扱尺もそり

あまうりて 扱尺もそり 神風やみのかいさきと

ひてあまうりて 扱尺もそり 扱尺もそり

字みのかいさきと 扱尺もそり

叶きぬいさきと 扱尺もそり

右て神まつて 扱尺もそり 扱尺もそり

三角柏とまり 延喜式もけ 三綱柏と云く 今あまうり

三綱の回事れるのとあまうり 三角と云く 扱尺もそり

扱尺もそり 扱尺もそり 扱尺もそり

扱尺もそり 扱尺もそり 扱尺もそり

扱尺もそり 扱尺もそり 扱尺もそり

扱尺もそり 扱尺もそり 扱尺もそり

扱尺もそり 扱尺もそり 扱尺もそり

扱尺もそり 扱尺もそり 扱尺もそり

扱尺もそり 扱尺もそり 扱尺もそり

扱尺もそり 扱尺もそり 扱尺もそり

也三節ハアラス又ミツノ共ミツノ共云ハ此を音  
相通也

一出納 スイナフトヨム也 雅亮装束抄ハ錦ニすまじ  
トアリシエツナフト云ハ誤也今世禁中ニテ出納ノ  
職ヲ勤ル者が自身ニシエツナフト云ヨニ 橘嘉樹ガ  
談リテ笑ヒキ 納ラズ音ナフ也 アテズハ 出納ハ藏人所  
ノ下司ニテ 職人方一切公事ヲ奉行スル職也上ノ言  
ヲ下へ出シ下ノ言ヲ上へ納ル意ニテ 出納ト号ス此  
方ヨリ出ルニハ 出ノ字ノ音シエツトヨム也 出納ヲ  
出ハ此方ヨリ出スノ義ナル故古ヨリスイナフト云  
来レリ今世シエツナフト云ハ故実ヲ失ヘル也 字彙

ニ云凡物自出則入聲使之出則去聲又云昌瑞切自内  
而外也去声 又云尺律切入之對也入声 玉篇云尺  
迹切去也入声

一ワカ草ノツマ 伊勢物語ノ昔男ハくろく人のむすめ  
とぬきとて 武蔵ヤシノつゆぬきくくくは 盆のた  
ふかぬきとて せとくまのむすめの中は ちとけぬき  
みらく人のけぬきぬきくくくは 火をくくとけぬき  
てけぬきとあり ちとけぬきくくくは ちとけぬき  
ほきぬきくくくは 抄物ハ ちとけぬきくくくは  
一妻とて又 花撰式も 婦をバババと云也  
右の歌ハ 婦ハちとけぬきとて 男ハちとけぬきとて

貞丈云何あよは海とワの草とまゝいふとたにふるある  
按しつらつ草は海とつらつ草は草の菜乃生ひあり  
菜細くちいさくまゝいひつけざればちかちかともありの  
つめぬくさう形しつらつ草のはのとこいとも草はまこと  
めまゝ相廻のまゝはあつてまをしよとまをせむはあつ  
まをすつらつ草といふは同創しつらつ草の仏と夫婦のつま  
同しつらつ草といふ右の如く物よりのこと

一 佐保姫龍田姫 神の抄あまを姫と云を司る神と  
龍田姫の如く神と云を神と云を神と云を神と云を神と云を  
妻と云を妻と云を妻の龍田姫ありて所万葉集の神と  
ワの草とあつてまをすつらつ草といふはあつてまをせむはあつ

按龍田姫と云は佐保姫と云を司る神と云を神と云を神と云を  
又と云

一 長祿之名詞 長祿と神人ノナガヨシトヨムハ神ノ千載集  
ニ所ニナリたりと假名ノナガキチクハ長祿家系に云ふげ  
つとにひひくさる人のおひひくさる女よ思ひておひひ  
そのてまをすつらつ草といふまをすつらつ草の九葉にかぎ  
つとにひひくさるて こと神といふはまをすつらつ草とい  
ふはまをすつらつ草といふ けなまをすつらつ草とい  
又まをすつらつ草といふとまをすつらつ草といふ 又まをすつらつ草  
といふはまをすつらつ草といふとまをすつらつ草といふ  
みよまをすつらつ草といふはまをすつらつ草といふ

とてたつぬまの人の殺もあはぬる 此一は  
りりやあつぬまの人の殺もあはぬる 此一は  
そと けつ首にそとを名とよみ入しるや 二そ  
よみこれをもと沈とす 右契仲と和字正濫要畧に  
つり凡古人の名ヨミヤリ此類猶多カルヘシ

一養子 戸令曰凡棄妻須有七出之状一無子義解曰謂  
雖有女子亦為無子更取養子故也○養子上古ヨリ有  
ル事ヲ知ルベシ

一罵詞メト云ベト云ハ相通ノ音也又部ノ字ヲブトヨム字  
ノ音也ベトヨムハ字訓也ベトメト云ハカニタチベヲカ  
ニタチメト云ヒスベテギヲスメラギト云ヒヲニサ

ベシヲヲミナメシト云ニテ知ルベシ

相通ノ人ヲ罵リ賤メテ畜生ノ盗人メナト云其メ

ト云詞ハ部ノ字也音メニ通ズル也畜生ノ部類ヨ盗  
人ノ部類ヨト云意也然ルニ一轉シテ部類ノ義ニ拘

ラズ只メト云詞ハ罵リ憎ム詞トシ思ヒテ真ノ畜  
生ヲ畜生メト云ヒ真ノ盗人ヲ盗人メト云ハ理ニア

タラズ或ハオノレメセガレメナドモ同シ

一サバレト云詞 古書ニサバレト云詞アリサモアラ

ハアレト云ヲ畧シタル也サマレト云モ同シ文字ハ  
速莫アサモアハノ二字也サモアラハアレト云ハサ

ナリ



一行字ノ訓 古歌ニユクトモイクトモヨメリ相通

之音ナリ

一齋宮停廢 上池院士佛名慧勇号健叟侍于將軍良臣也義詮義満義持義量公等

也代 伊勢大神宮參詣記云 齋宮と申すはたえて久安御宇

しをちのち再具カラスと云 花やふる風情なりと云

いづも芳也山の標たるをいづれ源家の京の女所花

あふるるあよふをいづる女家の名のもゆると云ふの山下り

も及ぶに神意のつけおそしきまぬ政にりくはけけし

おひ合をもゆるしとそはちのちの社のも也云 芳也山の

標ハ後醍醐天皇の山所を云 源家の京の女所也ハ後宇

多院の山所と云 後醍醐ハ後三ツ 後宇多の時并子内親王

宮下り多事の後ハ秋と絶しと云 後ハ後醍醐の山所を云

の長礼ありと云ふ永く断絶しと云 度會神主出口延佳

カ右ノ参詣記ノ首書ニ云大神宮例文云并子内親王

大覚寺法皇ノ女自野宮御退下。大覚寺法皇ハ後宇

多院也。御退下トハ野宮ヲ退テ伊勢ノ齋宮へ下り

玉ナ也

一忌部神社 讚嘉寒川郡前山村多和神社是則式内式

トハ延喜式ノ神名帳ニリ也ノ社也四国ノ内ニテ三

社ノ御社ト称ス祭ル神ハ手置帆負命也忌部氏相近

キ長尾村神正院ノ支配也社領ハ少玉無之至極ノ小

社也。右天明三年癸卯讚岐高松ノ郡奉行中村段治

雅徵 = 同シ = 段治彼国 = 於ノ聞糺ス所 = 吉成左志  
摩ト云者方ヨリ段治入送ル書如右也忌部社之義東  
郡同職中ニテ吟味仕候所右之趣 = 相聞申候尤神正  
院旧記等ノ義ハ如何ト云ハ此方ハ兼テ不申ル  
ト吉成カ状ニアリ此左志摩ハ神職ト聞ユ  
一サガナシト云詞サガハ悪ノ字也人ノサガ世ノサ  
カナド云ハ皆悪ヲサガト云然ルニサガナシト云ハ  
悪キ事ヲ云也サガナシハ善ナルベキニ悪キ事ヲサ  
カナシト云ハ不審ナルガ如シ按ルニサガナシト云  
シハ有無ノ無ノ義ニハ非ズナシト云ハ助語ニナ  
ルト云詞 = 同シサガナルト云トオホケナキト云

ハ大ケナル也 通音也 ハシタナキト云ハハシタナキ  
也ナタジケナシト云ハカタジケナル也 難ニトケル  
氣也アリイフ冥加ナキト云ハ冥加ナル也是等ノナ  
シハ皆同例ニテ無ノ字ニアラズナルト云詞 = 同シ  
一寶字訓 タカラト云ハタナカラト云ヲナカラト云  
テタカラト云也タハ田也ナカラハ税也 租米ト云 依テ出来  
ル也サレバタナカラト云ヲ畧シテタカラト云也米  
ハ人ノ命ヲツナグ物ナレバ米ヲ以テ宝トスル也天  
明三癸卯年江戸ニ米ノ價甚高直也上ニ七月ニ  
至リ信州浅间山焼出ニ大石ヲ飛ニ地ヨリ熱湯沸出

石ニテ人家ヲ打潰シ人畜ヲ打殺シ熱湯ニ押流サ  
レテ人畜死スル一夥ニク又處ニ依テ地窪ニ落入テ  
人家男女牛馬等埋レ入テ死スル者數ヲ知ラズ其近  
國ニハ燒灰砂石降テ田畠ヲ埋ミ稻粟稗モ皆灰砂ノ  
下ニ深ク埋マレタリ其外箱根ヨリ東ノ諸國稻ミツ  
ラズ大不作奥州ニハ仙臺南部津輕等一回ニ稻不熟  
ニテ大凶年也依之江戸ニテ米穀甚少ク同四年公義  
ノ御藏ニモ米無ク無難ニ收納ノ大名等ハ御借り米  
ヲ被仰付ル程ノ事工へ米直段金一兩ニ米五斗後ニ  
ハ四斗内外ニモ買賣スル故武家町人共ニ大ニ難儀  
至極ニ路傍ニハ所々ニ飢死ノ者アリ町人富有ノ者

金銀ハ多ク持タレ共米少キ故買フ事成ラズ貧人ト  
同ク粥ニ菜ノ葉豆腐ノカス薩摩芋ナドヲ交テ朝夕  
ノ食トセリ金銀ハ多クアレ共食レザル物也此時ニ  
ソ世ノ人米ハ宝ノ第一也ト知りケレ金銀ガニアレ  
ハ万事万物調ラザル事ナシト兼テ思ヒ入タルトハ  
大ニ相違ナリ  
一ツトメテト云詞二品 一ニハ勤テ也又努力ハチカ  
ラヲ入レテ強テ勤ル也二ニハツトメテノ日ト云ハ  
明ル日ヲ云ツトメテノ年ト云ハ明ル年ヲ云又ツト  
、云ハ夙ノ字晨ノ字等ニテ早朝ノ事也  
一玄武之圖 四神之図東方青龍西方白虎南方朱雀北

方玄武ヲ画ク玄武ト云ハ亀ニ蛇ノ纏ヒタル形也是  
ヲ古ヨリ蛇ハ雄ニテ亀ハ雌也蛇亀交接スル也ト云  
傳ル也是誤也亀ハ亀ノ雌雄アリ蛇ハ蛇ノ雌雄アリ  
各別也土ヲ掘起スニ亀ノ子出ル事アリ其中ニ蛇ノ  
子交リテ有ルヲ無シ又土中ニ蛇ノ子出ルヲアリ其  
中ニ亀ノ子交リテ有ル事無シ是ニテ知ルベシ異類  
何リ交接スル事有テニ假令交接シタリトモ異類何  
ソ孕ム事アラニ哉蛇ト亀交接スルト云ハ陰陽造化  
ノ理ニ甚昧キ説也俗談ニ狐ガ女ニ化シテ人ノ妻ニ成  
リテ人ノ子ヲ産タリト云ヒ或ハ蛇ガ男ニ化シテ女ニ  
交リ人ノ子ヲ産シト云類有リ狐蛇等ノ妖ヲナシテ

人情ヲ惑ハシムル事ハアルベシ異類ニシテ實ニ交  
接ニテ孕ム事ハ決シテナキ事也天地陰陽自然ノ造  
化ノ道異類相交リテ產生スル如キノ紛ラハシキ事  
ハ決シテナシ医書ニ鬼胎ト云事アリ鬼魅ト交接シ  
テ孕ム事有リト云是亦狐狸ノ類ニ弄ラレテ邪氣ヲ  
受ル故気血ノ巡行常ヲ失ヒ月經凝滯シテ塊ヲナス  
事アリ真孕ニ非ズ

一 赤子握符 世ニ安産ノ符ト云テ小紙ニ符ヲ書ク  
ルヲ丸メテ孕婦ニ吞シムルニ子ヲ産出スニ其赤子  
ノ年ニカノ符ヲ握リテ生ルト云是僧ト取上婆ト心  
ヲ合テスルワザ也子生レタル時以前母ノ吞タル符

ト同じキ符テ婆カ持来テ密ニ赤子ノ手ニ握ラセ置  
タル也如此ノ奇怪ナルヲナスニハ必ス一味同心  
ノ者有テスル也軍將ノ腹心ノ士ヲ使フニ同シ

一高砂ノ尉姥 賀儀ノ宴ノ日盃ノ臺其外賀ノ器物ニ

高砂ノ尉ト姥ノ形ヲ造リ饗物トスルヲ古代ハナキ  
ト也是ハ猿樂ノ謡物ノ高砂ヨリ出タルト也彼ノ謡  
物ハ賀之ガ古今集ノ序ニ高砂住ノ江ノ松モ相生ノ  
ヤウニ覺エトイヘル詞ヲ本トシテカノ兩處ノ松ノ  
精夫婦ニバケテ出テ阿蘇ノ宮ノ神主友成ト云フ人  
ト回答シタル由ヲ造リテ謡フ也是寓言ニテ實事ニ  
非ズ妖怪談ノ偽言也サレハ彼ノ尉ト姥トノ形賀物

トスベカラズ松ノ精ニテ生ズル物ハ茯苓茯神松茸

ハツタケ松露ノ類アリ老人夫婦ノ生ズル事ハナシ

本草綱目ナドニモ見エズ

一老翁称尉 老翁ヲ尉ト称シ尉殿ナド云尉ノ字ハ

用ヒ誤リ也尉ハ左衛門尉兵衛尉ナトノ官也尉ノ字

ハ老翁ノ事ニハ非ズ大ノ字ヲ用ベシ大ハ丈夫ノ意

ナリ丈夫ハ年々ケタル人也ツク人ヲ也老ト云フ

一假名日本紀 釋日本紀卷十四同日下曰此段假名日本

紀者太政殿下ノ御書也博士為決此疑申給○同書卷

一開題曰問考讀此書將以何書備其調度哉答師說先代

旧事本紀上宮記古事記大倭本紀假名日本紀等是也

又問假名日本紀ハ何人所作哉又此書先後如何答師  
說元慶說私記云元慶云為讀此書私所注出也作者未  
詳又問假名本ハ元末可在為嫌其假名養老年中更撰  
此書然則為讀此書也不可謂私記答所疑有理但未見  
其作者云々今案假名本世有二部其一部者和漢之字  
相雜用之其一部專用假名倭言之類上宮記之假名已  
在旧事本紀之前旧事紀古事記之假名亦在此書前  
可謂假名之本在此書之前或書云養老四年令安麻呂  
等撰錄日本紀之時古詩假名之書雖有數十家皆以勅  
詔為先然則假名之本尤在此前耳。貞文案假名本ハ  
真名本ノ前ニ在ト云ハ信ニ難シ一部者和漢之字相

雜用之云云然ラハ和字ト云ハいろは字ヲ指ス也四  
十四代元正天皇御宇養老四年ノ比ハイマ夕いろは  
字無之五十四代桓武天皇ノ御宇ノ比弘法大師いろ  
は字ヲ作レリ日本紀撰シ時ヨリハ遙ニ後ナリ又和  
字トアルヲ片假名トシテ考ルニ片假名ハ吉備公ノ  
作ト云傳ヘタリ吉備公日本紀ヲ撰ハシシ養老ノ比  
ノ人也是ニシテモ假名日本紀ハ真名本ヨリモ以前  
ニ有リトハ云ガクシ又假名トアルヲ真假名ノ事ト  
シテ考ルニ真假名トハ万葉集ノ如ク音訓ヲ備リテ書ク也既ニ本文ニ漢字  
ニ對シテ和字ト云夕レハ真假字ノ本ト云トニ非ズ  
一三種大被 神道ニ三種ノ大ハラヘトテトホカミ

ミタノ坎<sup>カニ</sup>震<sup>シ</sup>巽<sup>シ</sup>離<sup>リ</sup>坤<sup>ン</sup>兌<sup>ケ</sup>乾<sup>ケン</sup>ハラヒタマヘキヨメテタマ  
フトヨム也是被<sup>レ</sup>訓ニハアラバアヤコリ也トホカミ  
エミタメト云ハ龜<sup>カメ</sup>トトテ龜ノ甲ヲ火ニヤキテウラ  
ナヒスル時ノ唱<sup>ナ</sup>ヘ言也又其龜ノ甲ニトホカミ。エミ  
タメ。トテ五ツノ名所アリ又坎震巽離坤兌乾ハ周  
易ノ八卦ノ名也是ハ龜トニハ用ザル也龜トト周易  
トヲ一ツニ交テソレヲ三種ノ大被<sup>レ</sup>ト名付テ中臣ノ  
被<sup>レ</sup>訓ト同シヤウニ覺ヘテ唱ルハ餘リニオロカナル  
事也又八卦ノ名ヲ用ズルニテ十二支  
一人ヲブト、云詞 舞人<sup>マヒ</sup>在<sup>レ</sup>藏<sup>レ</sup>人<sup>シ</sup>方<sup>ク</sup>人<sup>シ</sup>旅<sup>シ</sup>旅<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>  
能<sup>ク</sup>全<sup>ク</sup>人<sup>シ</sup>ヲフトハヒト也ヒトフト音相通也フトヲ詞

ニハ。ウト、云是亦ウト通音也

一人ヲ。ト云詞 射人<sup>ヤ</sup>騎人<sup>シ</sup>歌人<sup>カ</sup>舞人<sup>マヒ</sup>飲人<sup>シ</sup>  
食人<sup>シ</sup>討人<sup>シ</sup>斬人<sup>シ</sup>ノ類也ヒト、云ヲ上畧シテト、  
云ヒトヲ轉シテ。トト云也トテ相通ノ音也俗ニハ詞  
ニマカセテ年ノ字ヲ用ル也又膳<sup>シ</sup>夫<sup>シ</sup>ヲ。カシハテト云  
モ膳人ト云ニ同シ食物ヲ調ル人ノ事上古土器ナド  
モナキ世ニハ柏ノ葉ニ食物ヲモリテ食シケル故庖  
丁人ヲ。カシハテト云ナリ今モ神祭ニ柏ノ葉ニ神食  
ヲモリ柏ノ葉ニ神酒ヲリ、キ吞ムナリ  
一ニ十ガドリ 万葉ニシ十ガトリ 楮<sup>カ</sup>奈<sup>ナ</sup>トモ。シ十ガト  
リ阿波トモ云フベキ枕詞也按ニ。シ十ハ米ノ一名ヲ

シ子ト云子ト相通ノ音ナレハ。シ子ヲ。シ子ト云ヘル  
也和名杓ニ糺カチ加知カチ之稱カチ也。糺乃古利之稱カチ。清  
漬シテル米カチナリ。糺米カチ宇流カチ之稱カチ也。是皆シ子ト云ハ米ノ  
事也。米ハ五穀ノ惣名也。稲ヲ專ニ米ト云ハ櫻花カト  
リトハ苅リ取りノ略語也。シナガドリハ鳥ノ名ニハ  
アラズ。晨事作業ノ詞也。サレバ神樂歌ニシナガトル  
ト云歌アリ其歌ニシナガトル印本ニハトリトアリ  
井ノ湊ニ。アイト。ツル船ノ。ナゲヨクマカセ。フナカ  
タフクナ。歌フ也。井ト相通ノ音也。サレバ猪奈ヲ稻ニ  
カヨハセテシナカトル米苅取ヲ以テ枕詞トシタル  
也。阿波ト云枕詞ニ。シナカトリト云モ阿波ヲ粟ニヨ

セテシナカトリアハト云ナリトリトモ云ハ作業ノ  
詞也。鳥ノ名トシテ様々ノ異説アルハ誤也

一五節櫛 五節ノ童御覽ノ時舞姫御前ニ参リテ色  
ノ紙ヲ重子テ櫛ヲ包タルヲ御前ニサシ置テ退ク也  
御目トマリタル舞姫ノ櫛ヲハ取召ル也。御前ニ櫛  
置タル躰古キ五節ノ繪巻物ニ見エタリ。○右京大夫  
建礼門院建礼門院家集ニ云。屋志海のおとそやこの比をきこ  
ゆめさの糸申納とゆえにみまよ根こをきこ  
よとたがや給をきこゆめさの糸申納とゆえにみまよこをきこ  
ゆるくはらたかたのめさの糸申納とゆえにみまよこをきこ  
ゆるくはらたかたのめさの糸申納とゆえにみまよこをきこ



さしきりかゝるしるしを  
かゝりてしるしを  
○今物伝書 伝書 云らるるは世に不所のしるし  
かゝりてしるしを  
てゆめしるしを  
はるしを  
くしるしを  
きんてかくまでもえよ  
しるしを  
とらるしを  
しるしを  
○公事根源 一条兼良と  
十一月五日 兼良の条 申の丑乃

日とほみさの性産の誠と  
日とほみさの性産の誠と  
日とほみさの性産の誠と

一太刀、空目貫、衛府の太刀ヲ始メ柄ヲ糸ニテ巻ズシ  
テ、藪ノ皮ヲキセタル太刀ノ柄ニ双ノ方ニヨセテ小  
ク花菱又ハ菊ノ花又梅花等ノ形ノ金物ヲ並ベテ打  
ツヲ空目貫ト云或ハ糸苞コシメノ形ヲ作りタルヲタ  
ハラ目貫ト云是モ空目貫也空目貫ト云ハ柄ニ藪皮  
ヲキセテ其藪皮ノ合セ目ヲ重子テ其合セメノ上ニ  
重子タル皮ノ端ノハ子アガラ又為ニ釘ヲ並べ折テ  
トメ置也其釘ノ頭ヲ花菱其外サマクノ形ヲ作ル  
アリ一各花化粧目貫ト云タハラノ形ヲ用ルハ今世

武家ニ用ル衛府ノ太刀ニアリ 堂上ニ

一古今三鳥傳 古今集三鳥傳ハすゝゑるいふおほせき

あなごのこト云 雲の上より人 あらうらのたのしみあはれ

あはつるこゝろ おの上 神がたしなあはせ

あはれなるいけさく風 か まま 〇 あなごの春

の秋 い 拾遺集神樂歌より 古今 今昔の傳より

いぢやま 古今 二鳥 一 流 あ ち あ ち あ ち

神樂歌 あなごのあなごの あ ち あ ち あ ち あ ち

の秋 い 拾遺集 あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

あなご あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

堂上ニ

いふおほせき

あはれ

あはせ

あなごの春

あなごの傳より

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

又之カ筆集ニ云 稻負鳥

其讀以業於 保世度里

一ツ。モツト云 詞 俗語ニ二品アル物ヲ分テ云 詞ニ

マツトモ。モツト共云 此マツト云ハ。マタノ下畧也。モト云

あなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

あなごのあなご

ハ。一轉ニテモトナル也。マトモハ相通ノ音也。又イマ  
一ツトモ云ハ。イヤマ夕一ツト云ノ略也。弥又也。今ノ字ニ  
ハアテフズ

一キリト云詞 幾日ギリ。有リキリ。エシギリ。アシカリ  
ノ類ハ。カギリノカノ字ヲ畧シタル也。限りノ字也

一和歌我國風流 玉海卷十七下曰和歌者我國風流也。安  
三年六月  
十日ノ条

一驛路鈴 參東記參議經曰寬仁元年十月二日早旦幾  
内七道並給大宰宇佐使祿官符仁加署令渡外記驛鈴

東海道 伊勢国多度社尾張国熱田 駿河国浅間  
伊豆国三島 下總国香取 常陸国鹿嶋

卅

東山道 近江日吉 美濃不破 信濃須波 上野貫前  
下野二荒 陸奥塩竈 出羽大物忌

卅

北陸道 若狭 若狭彦 越前気比 能登气多 加賀白山

山陰道 出雲 能登 杵築

山陽道 播磨 伊願 美作 中山 備中 吉備津彦 安藝 伊都岐嶋  
本三、カ、六、カ

西海道 筑前 宗像 住吉 筑後 高良 宇佐 香椎 石清水姫  
肥後 阿蘇

一橘氏は定移藤氏並功課別當。玉海卷十七下曰抑此  
一族貞丈云藤氏為橘氏は定由来者氏公卿絶之後無

人于行氏爵事仍寬和之比中関白道隆為大納言之時  
蒙 宣旨所行也其所以者撰津守中正之妻者中納  
言橘澄清女也即道隆道兼御堂等之外祖母也依彼昭  
穆行此爵事

橘氏

舉狀宣旨等案

舉狀諸以右大臣被令定行氏爵

右氏人之中無公卿之時隨氏族申請被下 宣旨令  
定行氏爵者例也爰於舊凡為中納言橘澄清卿女嚴子  
之外流依非無昭穆請由関白之處分已以如件仍錄事  
狀謹請處分

安元三年四月十三日

散位從五位下橘朝臣

散位從五位下橘朝臣政光

散位從五位下橘朝臣親良

散位從五位下橘朝臣以實

散位從五位下橘朝臣

散位從五位下橘朝臣清成

從五位下行真人正橘朝臣清定

前筑<sub>末</sub>守正五位下橘朝臣以政

宣旨

正二位大納言源朝臣定房

宣奉 勅宜令件大臣定行彼氏爵事者

宣旨  
同年五月廿三日大外記兼越中權守清原真人頼業奉  
功課別當仰言様

正六位上橘朝臣国貞

安元三年六月五日

被是定右大臣宣云件人宜為梅宮功課別當者

同年同日別當正五位下行少納言兼侍從長門權

守平朝臣信季奉

一 功課別當 右に見タリ勤仕ノ功勞アル人ヲ撰テ官

位ヲ進マシムルナリ其功勞ヲ撰ミテ申シ上ル行人

ヲ功課別當ト云功課ヲ功過ト書ハ誤ナリ

一 鈴舟 夫木抄卷廿二雜部四野題 千五百首歌合

一 法橋昭昭 （の） すがのこころをまよやましくしん法摩の

（中） （抄） 鈴舟ノ事日本紀ノ歌ノ釋日

本紀ノ釋共武藏鏡記ノ或書ニ行平ノ歌（在原）行平歌

（果）通記仁徳記引之曰 鈴舟とよせり波よおとるり 河テ

の上ゆききりるるなり 右夫木抄昭照の歌よかむれ

り （波よおとるり） 水をさらむるをゆきをどろくべし 舟の歌よあり

一 米ヲシ子共ヨ子共云 米ヲシ子ト云和名抄ニ稻加

知之稱（子）カ子ハ（脊）也粘乃古利之稱（脊）殘リタル米也 統米宇

流之稱（子）ナリ又古歌ニカシ子トヨメルハ遅米也カリ

シ子畧シテカシ子ト云右何レモシ子ト云ハ米ノ事

也夫木抄才十八 清輔朝臣 石川禎の長

白物よりいひて其の法は、電子トアリカ、祿八十月、  
不<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>と自判セリ。シ子ト云ハ死子ト云ニ似タル故後  
代物イマヒニテ。シ子ヲ。王子ト云ヒカヘタル也。ヨハ  
吉ノ意ナルベシ。勲子ハ無シト云ニ似タル故モノイ  
マヒニテ。有<sup>レ</sup>ノミト云ヒカヘタルト同シ義ナリ  
一ハ十子狀。放狀也。庄園ナドヲ人ニ譲リ與<sup>レ</sup>ル時我  
が手ヲハナシテ。ツヅリ口タス口ケヲ書タル狀也。即  
チエツリ證文也。詰<sup>レ</sup>文書ト。ハナシテ狀ト  
一雜色白丁。職員令、木工寮ニ工部二十人義解ニ云謂  
不限雜色白丁取<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>エ者充<sup>レ</sup>云ニ負大云雜色モ白丁モ  
衣服ノ色ヲ以テ云ニハ非<sup>レ</sup>ズ雜色モ白丁モ無位無官

ニテ奉仕スル賤シキ者也。雜色ノ色ノ字品ノ字ノ意  
ニテ雜品ト云カ如シ。雜役ヲ勤ル人品ヲ云也。白丁ノ  
白ハ素ノ字ノ意ニテ位モ官モ無<sup>レ</sup>ク云有位有官ノ人  
ハ身ニ彩色アルカ如シ。無位無官ノ人ハ身ニ粉色ナ  
ク白キカ如シ。故ニ白丁ト云丁ノ字ヨホト訓テ人  
ニ召シ仕ハル者ノ事也。仕<sup>レ</sup>ト云ハ此事ニ戸令ニ  
男ハ廿一爲<sup>レ</sup>下アリ字彙ニモ民事二十已上成<sup>レ</sup>トア  
リ玉篇下字注ニ強也壯也トアリ男年二十以上ハ身強  
ク壯也トアリ男年二十以上ハ身強ク壯ナルユヘ人  
ニ召シ仕ハル也サレバ仕<sup>レ</sup>ト云也。白丁ト云ヲ白張  
ト云フ服ヲ着ルユヘ白丁ト云由或説アリ白丁ノ白

ハ白張ノ白トハ別義ナリ。○後代家僕ノ品ニ雜色ト云名目アルモ雜役ヲ勤ル故ノ名也。

一 中華中國中夏中朝 是等ハ国名ニハ非ズ国ヲ貴ヒ

褒テ云稱也我國上古豐葦原チツクニ中列ト云中列中國同シ

類聚国史俗部十九殊崑崙人後頗習中國語トアリ此

中國ハ日本ノ事ヲ云也漢土ノ人ハ其自国ヲ貴ヒ褒

テ右ノ如ク稱ヘ日本ノ人モ亦自国ヲ貴ヒ褒テ右ノ

如ク稱フル也然ルニ近世ノ俗儒ノ輩日本ノ事ヲ夷

狄ト稱シ漢土ノ事ヲ中華中國トド、稱スルハ大愚

ノミナラス大賊也我生国ヲ賤メテ外国ヲ貴ブ事ハ

義ニ非ズ禮ニ非ズ聖人ノ道ニ乖ケリ

一 詔勅 二字共ニミコトノリト訓ニテ天子ノ御詞ヲ

詔トモ勅トモ云然レ共少差別アリ公式令ノ義解ニ

曰詔書勅旨同ク是綸言也但臨時ノ大事ヲ為詔尋常

小事ヲ為勅也ト見ヘタリ

一 攤 玉海一名玉葉月輪仁安二年十一月六日小

記セリノ事ヲ十二日今日御湯了中畧此間客人次有攤事先

置紙人公卿料紙於折敷居坏殿上次撤座上饗饌次立切

燈臺五藏位次敷管圓座於同座中央次自下臈谷

取紙置圓座進伏各一度次自下臈次第進寄折々宗家卿

每度入口同書同年十二月十日今日撰政獻所移徙也

中畧此間客人膳ノ事ヲ記セリ餐次置攤紙家主料下官料職次并置之

人別一積置各殿上人中只一積次御饌皆撤之或撤座  
初無路仍猶次經房殿上人指笏取紙經公卿座來此間  
皆被撤也者經方突膝置回座先撤饗之則  
云若殿上人可經黃諸大夫位也家上下官人間頗寸らうて置之經房乍  
于撰政云經座也指笏復座次俊光朝臣取紙參上置之儀如初其  
次立切灯臺次持參簡對等兩度ノ役人如初政命云先々殿上人二人取今不可寄也仍通能信範不  
寄也余按之先經房信範等可次右大弁實綱御取紙經  
座中置之乍指笏右廻復座次家通指笏進寄置之略座  
也拔笏右廻復座家皆如此次親範同實次雅賴同前指  
次邦綱同雅次忠親綱同邦次資長同忠次家通同資次家  
宗同家通次實綱同宗次實房綱同實次下官  
指回座依為

座前事有煩仍懷中者每度下官每入折了入塞撰政也下  
自廢欵仍以今案為之也官攤之時入次人可入之或由人云然而撰政自入之  
由被命仍所為之次撰政折了次々撤紙了次直火次  
引出物馬前馳受取之引出則下官退出了。負丈云  
攤ノ作法右ニ見タレ共攤ノ打ヤウ詳十ラズ右ニ筒  
ト云塞ト云名見エタレバ雙六ノ類欵折ト云事右ニ  
見タリ打時ノ詞十ルベシ又攤紙ト云フハ紙ヲ以テ  
賄物ニシテ勝負ヲ挑ム欵詳十ラズ百五十七  
益とこれを酒をひききとこれをだうん事とひき  
云、だハ攤也壽會院抄、大鏡、師輔との傳、だうん  
セのよとひき重六の沙居あまをも双六のゆい、搦囊抄、



も攤の事も又六博奕のやうのせうりき、諸抄皆双六の  
事とて、貞丈按攤と雙六のどく塞と別に入らざる事  
あり、右玉海の文より考べし、雙六と同事なり、  
和名抄雜藝類、雙六ト攤ト別々ニ出セリ、和名抄云雙  
六子一名六采、今葉簿是也、簿音又云意錢、攤字後漢  
書注云意錢、世同、世今之攤錢也、桂苑殊叢抄云、以手  
有所撓謂之攤、唐韻曰、撓音七、何及手、攤錢也、訓毛、無  
○徒然草野槌、春林道、攤、匏宏博經意錢者、何羨天纂文云  
説億一曰射意一曰射教即攤錢也  
○貞丈按漢土ニハ攤錢トテ手ヲ以テ錢ヲモム事アリ  
リト見エ此方ニテモ和名セニウキト云ハ錢ヲ的ニ

ニテ射意射数ト云別ノ錢ヲ手ニテモミテ的ノ錢ヲ  
打ツヤウノ事ニテアリケレバ双六トハ別ノ事ナレ  
共玉海ニ筒ト塞ノ事アリツレツレ草ニモ塞ヲ取レ  
バト云大鏡ニ重六ノ名アルヲ以テ考ルニ後ニハ攤  
ヲ双六ノ異名ノ如ク誤リ稱シタルルベシ源順ノ  
比ハ雙六ト攤ト別也  
一 啜粥祝 兎産レ三夜ニ啜粥ト云祝ノ式アリ玉海一  
云仁安二年十一月六日、庚自其夜亥時許有産氣畧耳  
刻許平産、男子畧八日今日三夜也啜粥、御前物許也  
先日、前内府許示定也成刻供御前物、折、十二本、陪膳  
修理大夫頼輔朝臣役人藏人五位六七人許自南面階

隱<sup>カク</sup>間供之<sup>カク</sup>女房等居簾中傳取供之事陪膳起座了不被  
 出也次有啜粥事其儀先下家司二人<sup>カク</sup>昇立粥案一脚於  
 南庭<sup>カク</sup>當階南間<sup>カク</sup>去<sup>カク</sup>次<sup>カク</sup>問<sup>カク</sup>口家司<sup>カク</sup>兵部大輔頭方着座<sup>カク</sup>  
四位亥日必々而今度四位  
稱障仍五位上薦勤仕之也  
 列立<sup>カク</sup>案南下家司二人取<sup>カク</sup>松明<sup>カク</sup>分立<sup>カク</sup>左右先盛<sup>カク</sup>粥授役人  
 等次家司問曰夕々次役人<sup>カク</sup>○第一<sup>カク</sup>人<sup>カク</sup>能登<sup>カク</sup>權宇<sup>カク</sup>以明<sup>カク</sup>又  
 問云此殿ニハ夜ナキニ夕々フ<sup>カク</sup>姫君ニ方ハヒコマス頭  
 方答云粥役人ト云次第迴殿中三反每度下家司人<sup>カク</sup>粥  
 也粥役人問之答之<sup>カク</sup>家司問之事<sup>カク</sup>迴了<sup>カク</sup>家司起座<sup>カク</sup>次役人  
 等置膳器於案上退出了下家司傳取可置也次昇出案  
 了

一權字音 俗ニハ清音ニナケントヨノトモ濁音ノ字  
 也玉篇ニ具貞切也然レバ濁音也ゲントヨムベシ吳  
 音ニナハゴシ也

御儀  
 丁未年十一月十日書寫  
 丁未年十一月十日書寫  
 丁未年十一月十日書寫

右此二上峯一冊天明四甲辰年十一月十九日起筆  
翌年乙巳三月十日書寫之切既成 多賀中原常政  
行年七十九歲而誌之者也是慰情之一端也可為莞  
爾歛



